掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成11年3月31日発行

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と
海光るわが故里

第７８号

鵠沼の歴史的家屋をたずねて③
芥川龍之介の住んだ別荘 …… 有田　裕一 …… 1
岸田劉生『村娘お松』のモデルをしたころ
川戸マツさんが語る思い出 …… 資料調査 佐藤　和子 …… 8
講演記録　「『女學世界』に咲いた花」
～ 内藤千代子について …… 森山　敬子 ……17
追憶鵠沼（1944年～45年8月） …… 木村　　梢 ……42
「クゲヌマエンシス」補遺 …… 伊藤　　聖 ……47
史跡見学 大磯町 …… 鈴木三男吉 ……49
第22回鵠沼公民館祭りの報告 …… 松岡　　喬 ……52
「鵠沼を語る会」活動の記録 …… 総務委員会 ……56
編集後記 …… 58

『新編相模風土記稿』（天保13年、1842）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会　発行

鵠沼の歴史的家屋をたずねて③

芥川龍之介の住んだ別荘

―東屋『イの４号』の記録

有田 裕一

（「鵠沼を語る会」会員）

鵠沼・東屋旅館の開業は、明治25、6年ごろといわれる。

しかし、創立者とされている伊東将行は、あの広大な旅館を一挙に建てたのであろうか。将行は同じ時期、鵠沼にあった「武相倶楽部」、「鵠沼館」に関与していたにしても、東屋の当初は「イの1号」から始まる貸家（貸別荘）群であって、その貸家群をいわば基礎にして徐々に広大な旅館へ発展させて行ったと見るのが妥当ではなかろうか。

そのことは明治期の文人江見水蔭が書いた『自己中心明治文壇史』を見てもよく分かるのである。

では、東屋旅館の源流となった貸家群は、どのような形で存在したのだろう。

芥川龍之介が住んだ「イの4号」はすでに有名だが、その他の貸家（貸別荘）となると、どこに、どのような形で建てられていたのか、必ずしもはっきりしない。将行の孫にあたる右近一夫氏らの話をもとに、おおまかな所在地をまとめた。それが次ページに掲げた推定所在図である。右近一夫氏は、お話しをうかがった後の平成9年に死去された。

東屋経営の貸家（貸別荘）が、全体で何号まであったのか、そうした詳細はいぜん不明のままである。また、貸家（貸別荘）によっては、一夫氏の記憶と昭和初期に藤沢郵便局に勤務して鵠沼地区を担当し、その後も藤沢の歴史を調べておられる渋谷良之氏（西俣野在住）との記憶に食い違いがあるものもある。そうした相違点はそのままにして、とりあえず現時点で分かった範囲内で、その概要を報告しておきたい。

また、「イの2号」「イの3号」「イの4号」については、右近家の方々から間取り図などをふくめ、ご親切な教示をいただいた。

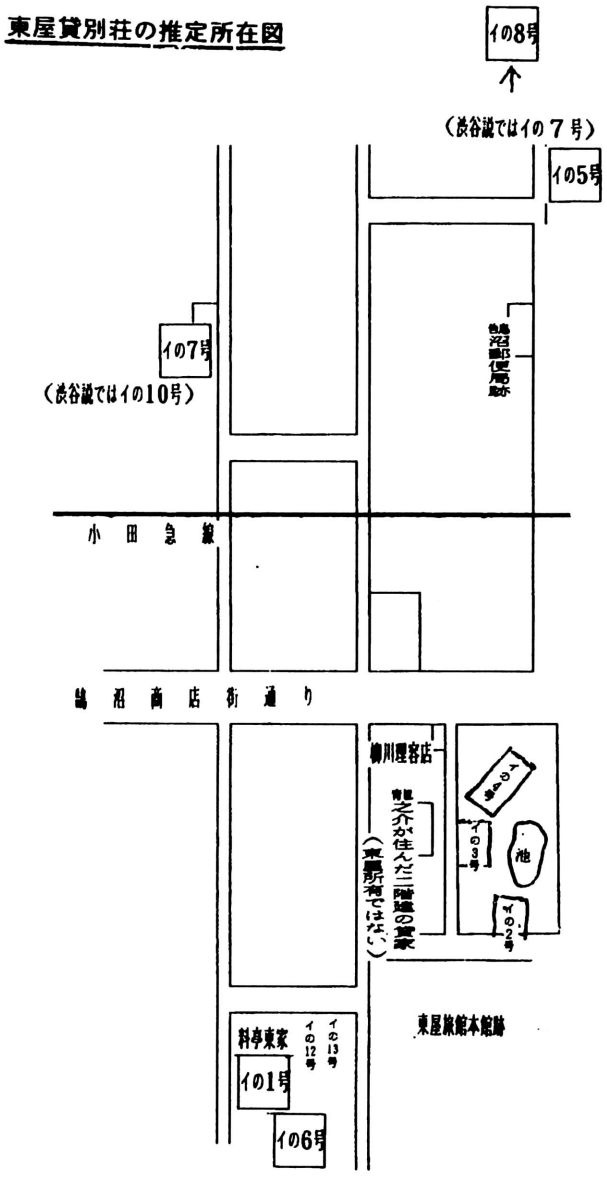
とくに「イの12号」「イの13号」の存在については、将行の孫として唯一人の現存者となられた右近辰之助氏が初めて明らかにされたものである。このことで東屋経営の貸家（貸別荘）は、少なくとも13号まではあったことがはっきりした。

お世話になった右近家の方々には、ここに記してあらためてお礼と感謝を申しあげます。

※

「イの1号」は、東屋本館から西へほぼ70㍍ほど離れたところにあった。

この場所に、伊東将行の2番目の孫で将行の養子となった伊東将治氏(平成10年死去)が、戦後、割烹料亭『東家』を創設した。『東家』は平成7年12月に店をたたんだが、一時、この割烹料亭『東家』と、かつての文士宿「東屋」が混同されていたことがある。野田宇太郎の『文学散歩』でも、藤沢市の史書の中でも間違って記述されている。この両者はあくまでも別物で、伊東将治氏が祖父の名を惜しんで同音の屋号をつけたのである。この際はっきりと両者の違いを指摘しておきたい。



「イの1号」は将行の隠居所として建てられたらしい。そのことは故一夫氏も明言されておられたが、その建物の面影を知る人は今はもう鵠沼にもいなくなった。

この「イの1号」に隣接して「イの6号」があった。

「イの2号」から「イの4号」のある一角が、芥川龍之介と縁の

深い別荘群となる。後述するように、この「イの4号」に龍之介は家族とともに質素な生活を求めて住んだ。この時期、「イの2号」にいたのが画家小穴隆一である。それは龍之介晩年の傑作とされる『蜃気楼』に登場する。また「イの2号」には、劇作家でありプロレタリア文化運動の長老でもあった秋田雨雀が住んだという話もあるが、確認はついていない。

「イの2号」「イの3号」「イの4号」のそれぞれの平面図と「イの3号」の側面図を次ページに掲げた。

いずれも右近辰之助氏と、故右近一夫氏の長女で、現在「イの3号」跡地に喫茶店「シェ・モワ」を営んでおられる桃沢正代さん(つまり将行のひ孫)にお世話になった。お二方とも記憶は明確だった。

「イの4号」の間取り図は平成4年に鵠沼公民館祭りで展示したが、「イの2号」「イの3号」の内部の様子がはっきりするのは今回初めてことである。なお、右近辰之助氏らはこの別荘群を「イの何号」という呼称でなく、「あずまや何号」と呼ばれた。図面では、その呼び名に従った。

とくに「イの3号」の側面図は、水が多くて増水の危険があった鵠沼の防水対策を兼ねた家造りとして、建築史的にも興味があるところではなかろうか。

「イの2号」は、昭和59(1984)年ごろに改築された。「イの4号」はもっと以前の昭和43(1968)年ごろ改築された。一角に貸別荘当時の面影をとどめるものは、いまや何もない。

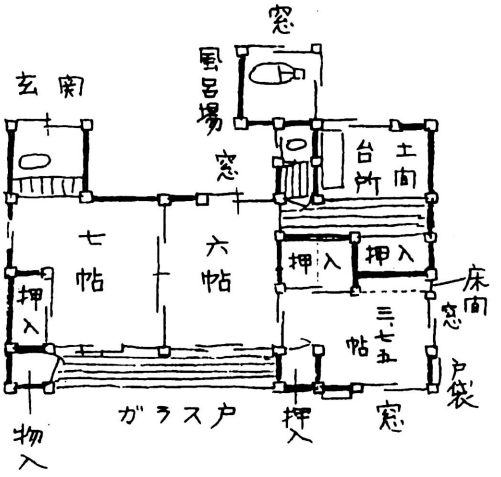
掲載図ではやや分かりにくいかも知れないが、この三つの貸別荘は一つの池を囲む格好で建っていた。それぞれの建物の南側に三尺の廊下があり、台所は北側、玄関は三和土、踏み石として自然石が置かれ、台所は土間であった。

屋根はいずれも地震に備えてトタン葺きであり、とくに池に近かった「イの3号」は、ほぼ三尺の高足式家屋になっていた。この形式が鵠沼の他の建物にもあったのかどうか、それはこれからの研究課題の一つであろう。

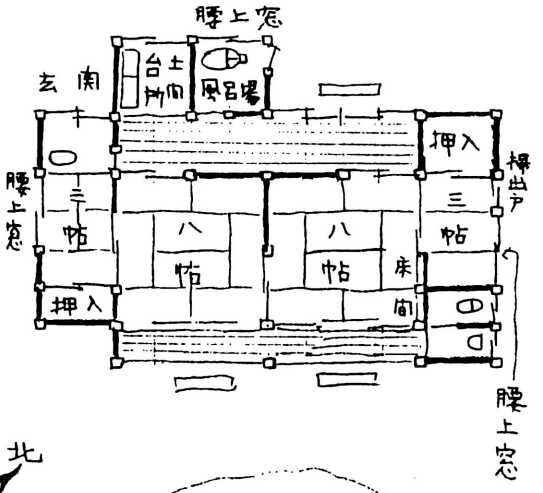
また、それぞれの建物の池に面した和室の窓は丸窓になっていて、一種の「粋造り」を思わせる。当時、鵠沼にあった他の貸別荘とは一味違ったものがあったとも考えられる。

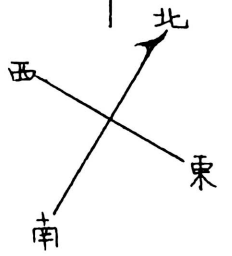
通りとの境界は板塀だったが、それぞれの別荘の間に仕切りはなく、隣接の民家や鵠沼一、二丁目を中心とした町内会館であった南部倶楽部などへも自由に

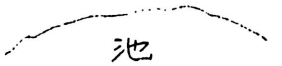
あづまや 2号(17.75坪)
(イの2号) トタン葺平屋



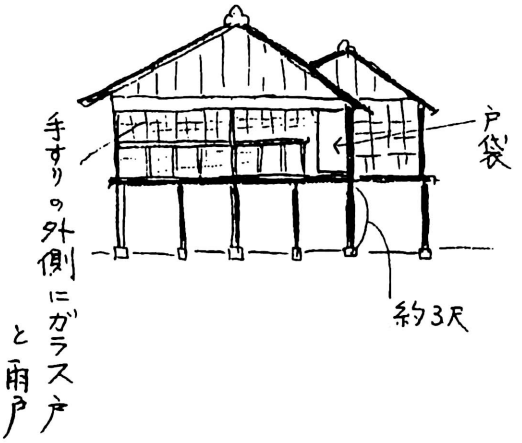
あづま屋 4号(21坪)
(イの4号) トタン葺平屋



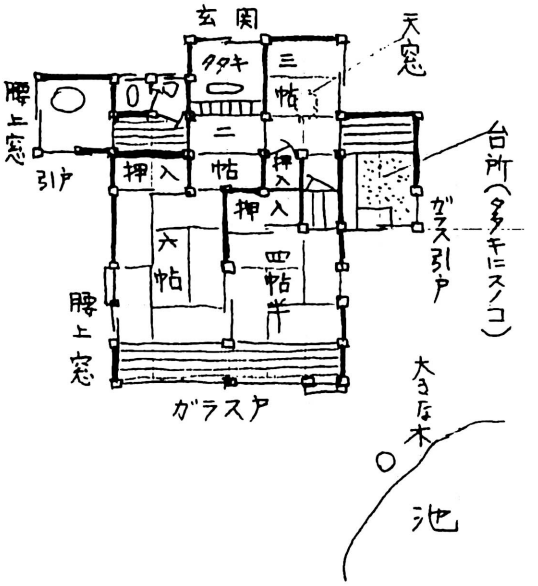




3号の側面



あづま屋 3号(15.5坪)
(イの3号) トタン葺平屋



行き来できた。

※

「イの4号」を有名にしたのは、やはり芥川龍之介だった。彼が住んだことで、この一角の貸家(貸別荘)群は、歴史に残ることになった。

次ページ上段に掲げたのが、「イの4号」の外観である。震災前の風景か、それとも後の風景なのか、そうしたことははっきりしない。右手奥に大きな屋根が見えるが、これは普通の民家の屋根である。

建物の周辺は葦や雑草で囲まれ、いかにもひなびた印象がある。当時の鵠沼の風景は、一般的にこんなものであったのだろう。

龍之介が「イの4号」に入ったのは、彼の最晩年である大正15(1926)年7月20日である。西洋皿一枚と缶詰だけの質素な生活をしたいという希望があった。

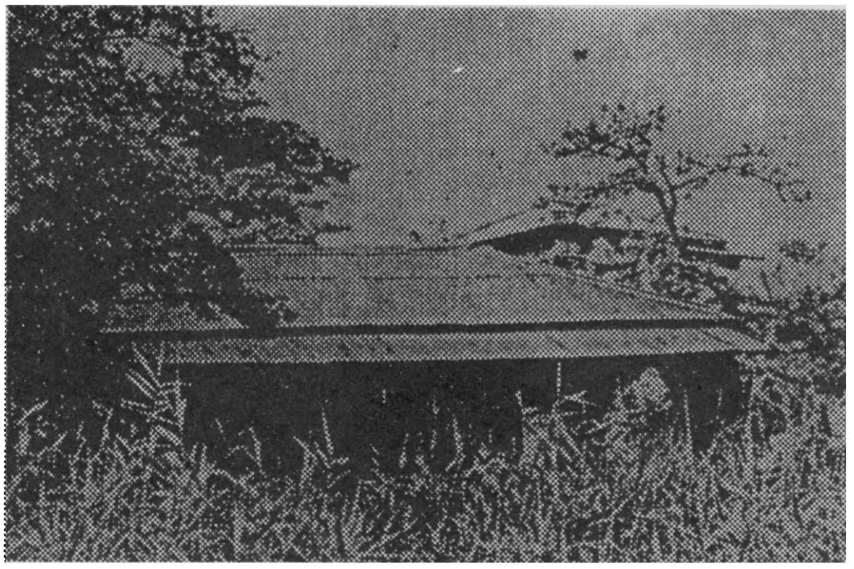
この「イの4号」に入って、家族と水いらずの生活を始めたときのことを、龍之介は「二度目の結婚」と称し、それなりに新鮮な気持ちでいたようにも思われる。

後に死に際して、友人の久米正雄に託し死後に発表された『或阿呆の一生』の『夜』の項には次のように書かれているのである。

「夜はもう一度迫り出した。荒れ模様の海は薄明かりの中に絶えず水沫を打ち上げてゐた。彼はかう云う空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には歓びだった。が、同時に又苦しみだった。三人の子は彼等と一しよに沖の稲妻を眺めてゐた。彼の妻は一人の子を抱き、涙をこらえてゐるらしかった」

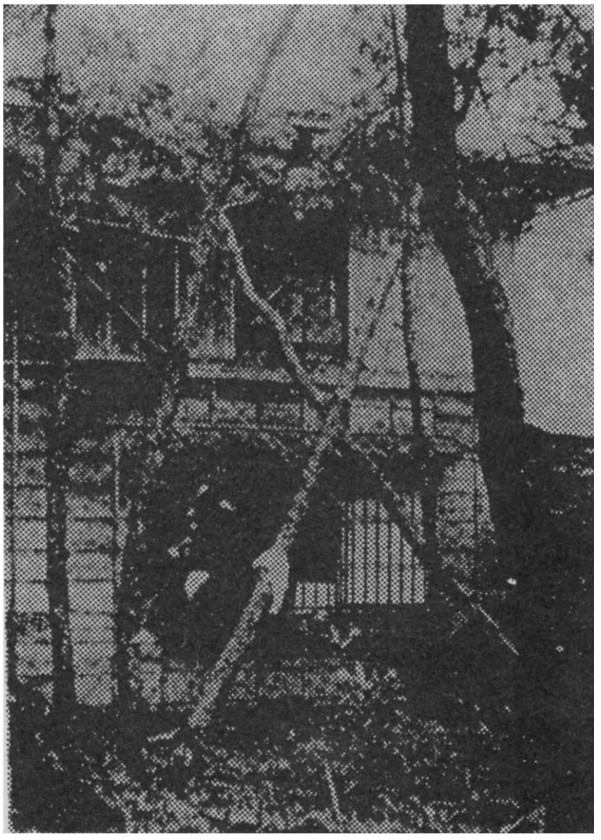
宇野浩二は「この鵠沼にいた頃が芥川のみじかい生涯の中でもっとも陰惨な時代であった」と書き、さらに「二度目の結婚」という表現については、「鵠沼の貸し屋で、夫婦と子供だけで、暮らすやうになったのを、しゃれて『二度目の結婚』と称したのである」と解説している。

「二度目の結婚」という表現は、大正15年8月24日、知友の下島勲に宛てた手紙にも使われていて、それには「ちょっとわれわれの二度目の新所帯に先生をお迎えして、ご飯の一杯もさし上げたい念願があります」と書いてある。この手紙は、



東屋『イの4号』（上の写真） 東南の方向、つまり縁側の方向から撮ったものと思われる。後ろの大きな屋根は一般の家屋で、現在の商店街の方向になる。手前には葦の群落があり、池があった様子がうかがえる。撮影年代は 特定できない。

（筆者所蔵）



龍之介が住んだ二階建ての家（左の写真）

『イの4号』とは路地をはさんでほぼ真向かいにあった。東屋とは関係のない建物である。ここに住んだころ、龍之介はアヘンを常用していて、この家から斎藤茂吉に「鴉片（あへんがん）丸乏しく心細く候間、もう二週間分ほど田端四三五小生宛てお送り下さるまじく候や」との手紙の出している。

「これらの物事は、みな、異常以上の異常である」と宇野浩二も驚嘆して『芥川龍之介』の中で書いている。

（筆者所蔵）

まさに「イの4号」で書かれ、鵠沼から投函されたものだった。

同年9月、龍之介は「イの4号」の真向かいにあった二階建の家へ移る。それが前ページ下段に掲げた写真の家である。この場所は現在駐車場になっていて、二階家は跡形もないが、ここは東屋とは関係がない。この二階家に住んだころ、宇野浩二がたずねて来て、それを宇野はその著『芥川龍之介』にこう記している。

「その家は、夜目で、よく分からなかったが、たしか、右も、左も、後ろも、まばらに、木立があって、小じんまりした、二階建の、家であった。

私が、入り口の格子戸をあけて、『ごめんください、』と云うと、すぐ、二階から、だまって、おりてくる、しづかな、足音のしないような、足音がした。

やがて、おりて来た芥川は、なにもいはずに、障子も何もない上がり口のところに、両手をひらいて、鴨居をつっぱり、両足をひらき、大の字の形で、立ちはだかった」

それから龍之介は「東屋へ行こう」と宇野を誘い、東屋の座敷で「酒は、いらない、すぐ、ごはん」と命じて、卵焼き、刺し身、ご飯という夕食をともにする。

「それは実にたのしかった」と宇野は書いている。

龍之介がこの二階家に住んだのは昭和2年1月2日までである。そして松の内の間に鵠沼から東京・田端へ帰り、同年7月24日には自ら命を断ってしまうのである。

◆

先にも述べたように、「イの4号」は間違って伝えられていることが多い。

『新潮 日本文学アルバム 13』(新潮社)に「鵠沼イの4号の家の庭の二階屋」とあるのは、東屋旅館の離れで、震災後に建て直されたものである。現在は個人宅になっている。そのことは『鵠沼・75号』にくわしい。藤沢市の広報誌『わたしの藤沢』(1995年28号)でも、まったく同じ写真が誤って使われている。

また筑摩書房版『芥川龍之介全集 第3巻』には、同じ家屋の写真が掲載され、「鵠沼海岸の東屋旅館の離れ 大正15年の晩春より盛夏にかけてここに静養す」とある。これもまた「イの4号」と本館離れを混同しているのである。

岸田劉生『村娘お松』のモデルをしたころ

---川戸マツさんが語る思い出



今もなお元気な川戸マツさん
（1999年3月、藤沢の自宅で写す）

岸田劉生の鵠沼時代を代表する画業に、『麗子像』と『村娘像』がある。
その『村娘』のモデルとなった川戸マツさんが、現在もなお藤沢でご健在だ。
「鵠沼を語る会」は、平成6年10月29日、鵠沼公民館にマツさんをお招きし、モデルのころの思い出などを語っていただいた。
当日は会員以外の方も多数参加され、マツさんの話に聞き入った。
当時のテープが文字にされないままだったので、ここに再録した。マツさんには改めて感謝したい。　（編集委員会）

司会　本日は藤沢市社会教育課（現生涯学習課）のご配慮をいただきまして、とうとうおマツさんご本人に来ていただくことになりました。（拍手）
ご承知のように、画家岸田劉生の鵠沼時代は、その画業の中で最も充実した時期といわれます。その鵠沼時代の絵を大きく特徴づけたのが、『麗子像』と『村娘像』とよばれる一連の作品でした。そしてここにいらっしゃる川戸マツさんが、その『村娘』のモデルになられた方でございます。

こうしてご本人に直接お目にかかれて、私どもは大変うれしく思っております。川戸マツさんは、旧姓葉山マツさん、結婚なさいまして川戸姓となられました。現在（平成6年）、84歳になられます。
今日は特別のお許しを得て、「おマツさん」と呼ばせていただきます。
それでは「鵠沼を語る会」の会員である有田さんにお話しの進行役をお願いいたします。
有田さんも鵠沼は古く、劉生とも縁の深い方で、現在、有田商店の４代目のご主人でいらっしゃいます。おばあ様の代に当時、鵠沼には１軒しかなかった洋食屋さんをされておられました。その店は『劉生日記』にもたびたび登場いたしておりまして、コールドビーフが大変おいしかったなどと書かれております。それではよろしく。

有田裕一　ようこそおいでくださいました。お会いできて、本当にうれしいです。今日初めてお会いするんですけれど、（『於松像』の写真版を掲げながら）本当にそっくりですね。目元から、きりっとした口元まで。

マツ　（笑いながら）とんでもないです、もう、年ですもの。84歳になります、もう。ねぇ。

有田　佐藤別荘、松本別荘にいらして時は何歳だったのですか。

マツ　そうですねぇ、7つか8つかごろに初めて伺って、震災の前まで、大正11年ごろまでですねぇ。

有田　そのころおマツさんのお住まいは、どこだったんですか。

マツ　昔、(1)郵便局がありましたのよね、いま、どこへいったのか分からないです。

有田　（地図を指しながら）これが鵠沼の商店街で、これが佐藤別荘跡です。ここのところに郵便局があったのですか。

マツ　はい、はい。すぐ隣でした。

有田　この前が(2)益田さん。

マツ　はい、そこをもう少しまっすぐいきましたところで、ここが交番がありまして、ここをまっすぐいったここらへんが(3)私の家でした。

有田　当時、この辺は人家もまばらだったのでしょう。

マツ　そうですね、前に高木さんという建具屋さんがありまして、そのすぐ前の家でした。松がいっぱいで、家はほんのところどころでしたから。

有田　岸田家へ出入りされるようになったきっかけは、なんだったんですか。

マツ　母がね、ちょっと頼まれて手伝いに上がってましてね、私がついていきましたから、そういう関係でした。ねぇ、もう(4)本に書いてある通りですから、私なんかからいうことはなにもありません（笑い）、ねぇ。

有田　劉生さんは大正6年にこちらにいらっしゃったんですね。『村娘』は7年に(5)松本別荘にいらしてから描かれた絵ですね。

マツ　松本別荘の方へ移ってからずっとです。(6)佐藤別荘の方ははっきり覚えていないんですけどね。

有田　最初、麗子さんを描いていて、そのうちおマツさんを描かせてくれということだったんですか。

マツ　えぇ、(7)母と一緒に行きました時に、マッちゃん、描いてやろうって。

有田　1枚の絵を幾日くらいで描いたんですか。

マツ　そうですね、その光線の時だけですから、一日何時間でもなかったですねぇ。一枚で何日かかったか覚えてないんです。(8)毎日毎日、同じ時間に。光線の具合ですってねぇ。

有田　20日も1カ月も？

マツ　いや、そんなでもなかったみたいですけどね。あの時分はまだ……ねぇ。

有田　じっとしているんですか？

マツ　そうです。ふだんはね、とってもやさしい、おじさん、おじさんって呼んだんですものねぇ。ですけどねモデルの時だけはとてもきびしかったですね。まさかこんな立派な先生におなりになると思わなかったですものねぇ。

有田　冬の着物が多いようですね。

マツ　昔はみんなこういう風な格好してたの。洋服なんか着ませんものねぇ。昔の、本当に昔でしたからね。いつもこんな着物でしたの。

有田　（絵を示しながら）ショールの絵がありますね。

マツ　あのショールは私のなんですよ（笑う）

有田　マツさんはつけないで、麗子さんが借りて……。

マツ　なんかきれいにできていて、松編みでしたけどね。きれいなもんだから、先生、気にいっちゃってね。麗子さんの本には(9)「代わりにお父さんが何かあげた」と書いてあるんですが、覚えていないんですよね（笑う）。きれいなんでしたけどねぇ。

有田　でも、よかったですね、ああやって永久に残っていますのもねぇ（笑い）

マツ　ねぇ。いまでもどなたかの家におありになるんだそうですよ。どなたか持っていられるはずです。

有田　近所の親が、自分の子どもを描いてくれといってきたそうですね。

マツ　ねぇ、おもしろいですねぇ。同級生の子でしたけどねぇ、山崎さんという八百屋さんの子でしたけどねぇ。(10)すぐ断っていらっしゃいました。私はそばにいましたけどねぇ、先生がやっぱりだれでも描けるわけじゃないから、とお断りになるのをそばで聞いていました。

有田　『鵠沼日記』には、相撲をとる場面が随分多いですね。

マツ　相撲はね、劉生さんのお庭には土俵があって、砂でね、そこでいつも書生さんととってましたの。そうすると家の(11)父が外から見ていたらしいんです。やっぱり父も好きでしたからね。そしたらなかに入って見なさいといわれたらしいんですね。なつかしいですねぇ。相撲、とってもお好きでしたよ。

有田　劉生は細かったんですか。

マツ　いや、太かった。私がモデルに上がったときには、もう太っていらしゃいました。きっと佐藤別荘ころは東京からいらしたばかりで知りませんが、松本別荘のころはもうでっぷりと太っておられたんですよ。

有田　写真を見てもそうですね。ほかの別荘でなにかご記憶のものはございませんか。

マツ　ここ何年も鵠沼海岸へは来ませんものねぇ。麗子さんと(12)40年ぶりに

会ったときに、放送局の方と鵠沼を見に来たんですよ。そいで山口っていう酒屋さんの前か、八百屋徳さんの前を真っすぐ行くんだと教えていったんですけど、その時分はまだ(13)二階家はあったんです。あったんですが、それから何年かたって行ったときには、もう全然、家はなくってね。近所で聞いたんですが、どなたもご存じなくてね。

有田　国分別荘がありますね、その前は左右田別荘といったんですが。

マツ　まっすぐ行きまして少しちょっと、こう曲がりますでしょ、あの近所はほとんど松林でしたね。

有田　古い川がありましたね。

マツ　川がですか？

有田　内藤さんの家がありましたね。

マツ　あゝ、(14)内藤千代子さんね。内藤さんの屋敷の中に、わたしの家もあったんです。内藤さんは裏、裏といっても通りが違いますの。私の家は益田さんの前をまっすぐ行った道、内藤さんはその反対側。ですから中をしょっちゅう行ったり来たりしていましたがねぇ。

会員　麗子さんは小学校はどちらだったんでしょうか？

マツ　鎌倉でした。鎌倉まで行かれたんですよね。

会員　麗子さんの思いでは。

マツ　遊んだことだけですねぇ。池の回りをあれしたりして。

会員　モデルで麗子とお松さんを競争させていたようですね。

マツ　ねぇ、競争ですね。

有田　（『村娘之図』の頭に挿してある花を見て）あの花、椿ですか？

マツ　あれは先生の家にあったんです。造花で、昔、かんざし、かんざしといっていましたけどね。

有田　(15)福田さんというお医者さん、覚えていらっしゃいますか。そのお身内の方がいらっしゃっています。

マツ　あゝ、そうですか。福田さん、へぇ。お会いしても分からないかも知れないですね。（あの病院）流行りましたものね。あらそうですか。

福田光代さん　福田でございます。私よく覚えております。

マツ　あら、そうでございますか。しばらくでございます。

福田　私は明治44年生まれです。

マツ　私も44年。それじゃあ一緒でしたか。

福田　私は1月、早生まれです。

マツ　私は8月。お宅様いつも人力車で通っていらっしゃいましたけどね。皆さん、ホラ、村のアレ集めて、福引なんかしましたでしょ。

福田　お雛様の時に、皆さんお呼びしてね。

マツ　そうでしたよォ。

福田　お名前は、先生の絵で覚えておりました。まァ、お元気で。今も鵠沼でいらっしゃいますか。

マツ　いまは藤沢で……。そうですかねぇ、懐かしいですよ。父が漁師でしたからねえ、新しい魚がとれるとお宅様なんかに届けてね、懐かしいですよ。

福田　皆さんからお野菜とかお魚とかいただきましてね。

マツ　ほんとに。ご縁がありましたらまた、どうぞ。

会員　ご自分の絵をもらってお持ちになられたことはあるんですか。

マツ　むかし黄色いツワブキの花か何かの絵をいただいたんですけどね。結局どこへどうなったか、いまあれば大変な（笑い）、まさかこんなになるとは思いませんですからね。

有田　髪の形は毎日、違うんですか。

マツ　母が六会から来たんですが、銀杏返しが好きで、いつもそれを結ってくれました。学校で式があるときだけ洗ってくれて、おさげにするのがうれしかったですよ。普段はああやって上に束ねていたんですね。もう珍しかったですね、あんな束ね髪、一人もいなかった。(16)先生はきっと珍しかったんですよ、ねぇ。

岡添さん　私は先ほど話が出ました佐藤別荘の孫でございます。岡添と申します。

マツ　えーッ。

岡添　祖母が劉生に家を貸して、引っ越した後に掃除にいったらば、トイレがとっても臭かった、どうもあの家は肉食が多かったらしいっていうの（笑い）。

福田　おマツさん、(17)丸山先生をご存じかしら。うちの2階の部屋を貸していたんですよ。

マツ　えぇ、丸山先生。まぁ、そうですか。私、学校行ったとき丸山先生でした。受け持ちじゃないんですけど。で、丸山先生がもう(18)時間がくると、「葉山、帰れよ」って、毎日その時間がくると先生がね。その時分、勉強のことはあれしなかったですわ、帰れっていわれれば、ハイって帰ってってすぐ岸田さんへそのモデルになって。

有田　先生公認だったんですね。

マツ　丸山先生にはずっとたってから1回お目にかかったんですけどね。もう亡くなられたそうですね。

福田　私の小学校5年生ぐらいの時まで家にいらっしゃいましたけど、それから東京へ行かれてそれから結婚なさってあいさつにいらして。それから春陽会に初入選なさったということも家にごあいさつにいらっしゃいました。家の二階にいらっしゃった時に(19)横堀角次郎さんもしょっちゅう遊びにいらして、2人で絵の話をいつもなさっていました。

有田　マツさんは関東大震災の時にはどこにいらしたんですか。

マツ　震災の前の年に藤沢へ越してしまいました。鵠沼の様子は知りません。

会員　モデルの描かれている方向がすべて同じ方向ですね。なにかあったんでしょうか。

マツ　ほとんど同じですね。昔、(20)高砂、高砂っていいましたね。高砂の方を向いて、そこに窓ガラスがありましてね、そちらを年中見ました。

会員　部屋の向きとか光のかげんということでしょうか。

マツ　ほかへ移ったことないですよ。同じところを、ここらへん、ここらへんといわれてね。そこを一生懸命見ている。そんなことでした。

有田　ほんとにどうもありがとうございました。どうかお元気で。

※

（1）**郵便局**　現在の松が岡3－23で、いまは駐車場になっている。東仲通り（天金通り）に面していた。

（2）**益田さん**　益田孝のこと。当時、三井物産社長を務めていた。三井合名理事長。鵠沼に住んだ大物財界人の一人。茶人としても有名で鈍翁を名乗った。

（3）**私の家**　現在の松が岡3－20－8あたり。天金通りに面していた。

（4）**本に書いてある**　岸田麗子著『父岸田劉生』などを指していると思われる。この中に麗子との出会いなどが詳しく書かれている。（7）を参照。

（5）**松本別荘**　松本陽松園のこと。現在の松が岡4－7の南側、同4－8の北側にあった貸別荘群。中に数軒の貸家があり、岸田劉生は松本陽松園に入ってすぐ右側の二階建洋館のある別荘を借り、大正6年から同12年まで住んだ。

（6）**佐藤別荘**　現在の松が岡3－23あたりで、駐車場になっている。天金通りに面している。

（7）**母と一緒**　岸田劉生が鵠沼で最初に住んだ佐藤別荘（大正6年2月～同6月）とマツさんの家はすぐ近くであった。マツさんの母が岸田家へ手伝いに行った際、マツさんも一緒についていったりしたことから、麗子との交友が始まった。松本別荘に移って以降、『村娘』のモデルを務めた。

岸田麗子『父岸田劉生』（読売新聞社刊）には次のように書いてある。

「佐藤別荘に越して間もなく、やがて『村娘於松像』としてたくさんの父の絵のモデルになったお松ちゃんのお母さんが、台所の手伝いに来てくれた。

お松ちゃんの家は佐藤別荘のすぐ近くだった。お父さんは虎さんといって漁師を業としている人だったが、お酒が好きでお松ちゃんのお母さんはそのため苦労が多かった。お母さんがうちへ御飯たきにくる時、お松ちゃんも一緒に来て私達は友達になった」

（8） **毎日毎日、同じ時間**　学校へ行っている時は、午後の一時限を終えたころ、先生の許可を得て帰宅、岸田家へ出掛けた（光線の関係からだったという）

（9） **「代わりにお父さんが何かあげた」**　岸田劉生の妻蓁（しげる）も **『劉生画集』**（平凡社）に次のように書いている。

「村嬢於松の掛けて居る肩掛けは時代の付いたもので、明治の頃よくあった染め分けの毛糸で手編みのもの、もう前の方は破れて汚れていましたがそれがかえって美しく、主人はすっかり気に入り、麗子と於松に代わるがわる掛けさせて描いて居ります。麗子のものでその頃流行って居たビロード風の、細長い今風のものと交換して画室の宝物になりました。今風のものを貰って於松も大喜び、吾がものとして主人も大喜びした肩掛けで御座います」

（10） **すぐ断っていらっしゃいました**　岸田麗子は前出の『父岸田劉生』の中で次のように書いている。

「これは今度四十年ぶりでお松ちゃん（現川戸武史夫人）に会うことができて、はじめてお松ちゃんから聞いたことだが、当時の田舎では“絵描きさん”というだけでも珍しいのに、そのモデルに選ばれていることは、お松ちゃんの家でも鼻の高いことだった。近所のうちではお松ちゃんをうらやましがって、うちの子供もぜひ描いてやってほしいと父の所へ頼みに来たおかみさんもあり、その時父が、絵のモデルというものは誰でもいいというわけにはいかないもので、絵になる顔とならない顔があるから、という意味のことをいって断ったので、そばでそれを聞いていたお松ちゃんは、内心、“どんなもんだい”と大いに嬉しかったという」

（11） **父**　葉山寅吉。鵠沼で漁師をしていた。麗子は「虎さん」と書いているが、「寅さん」が正しい。大正11年8月5日死去。

岸田劉生『鵠沼日記』の同日の項には「お松ちゃんの家、坊さんや何か来ておとむらいの様だったとか。ことによると寅さんでもなくなったのではないかなど話す」とある。

（12） **40年ぶりに会った**　昭和36（1961）年、岸田麗子とマツさんは、40年ぶ

鵠沼を歩く『麗子』と『お松』 ⇔



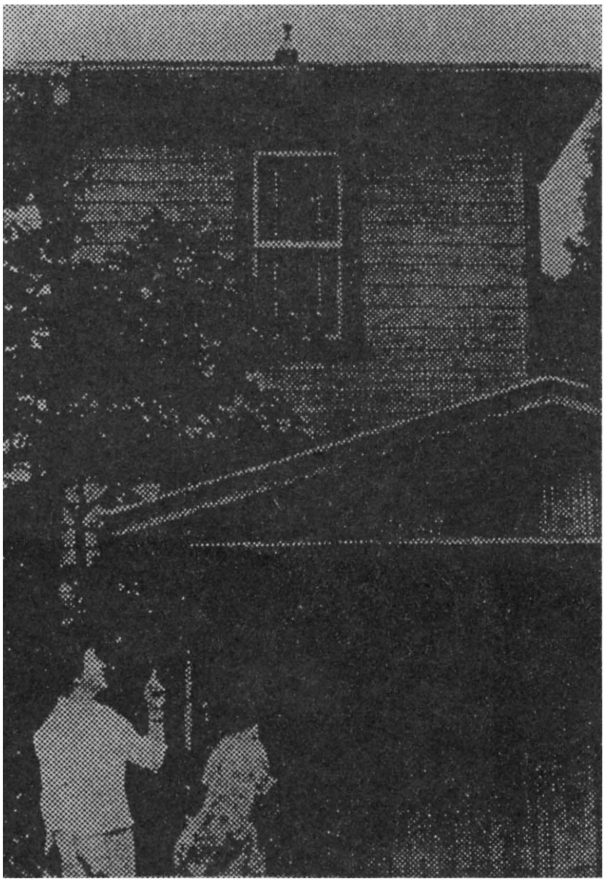
昭和36年、『麗子像』の岸田麗子さん(左)と 、『お松像』の川戸マツさん(右)は、40年ぶりに再会、なつかしい鵠沼の道を歩いた。

多くの場所が様変わりしていたが、二人は幼なじみにもどって、話は尽きることがなかった。

この時、麗子さんは46歳、マツさんは50歳だった。

この写真の撮影場所がどこなのかははっきりしないが、松本別荘付近であることは間違いない。『麗子』も『お松』も美しい中年になっていた。

(写真・川戸マツさん提供)



⇔ 劉生のいた二階建を見る『麗子』と『お松』

松本陽松園跡に残った二階建の西洋館をみあげる麗子さん(左)とマツさん(右)。西洋館は関東大震災で倒壊したが、ほぼ同じ形に建て直された。

このノッポの洋館の姿は、昭和30年代末まで、近くに住んでいた人たちの記憶にも残っている。

(写真・川戸マツさん提供)

りに再会した。この時、麗子46歳、マツさんは50歳。藤沢駅で待ち合わせたが、この幼友達同士は、顔を合わせたとたんにお互いに分かった。二人で思いでの鵠沼や松本別荘のあたりを歩いた。(**前ページの写真上**) また会うことを約束したが、麗子はその翌年、急逝した。

(13) **二階家**　劉生が借りた松本別荘の家にあった二階建ての洋館のこと (**前ページの写真下**)。劉生はこの階下をアトリエに使い、二階を書斎とした。前出の **岸田麗子『父岸田劉生』** には次のように書いてある。「鵠沼でたった一軒しかないという西洋館のついた家がみつかり、六月にそこへ越すことになった。それが松本別荘だった」「私達一家がすんだ家だけが母屋の他に洋館の二階建の一棟がついていたのだ」

(14) **内藤千代子さん**　女流作家。明治26(1893)年生まれ。8歳のころから現松が岡3丁目に住んだ。マツさんの家とは背中合わせだった。**(本誌17ページ、講演記録参照)**

(15) **福田さんというお医者さん**　東屋旅館のそばにあった鵠沼海浜病院の院長福田良平のこと。日露戦争時、陸軍戸山病院に勤務、後に東屋旅館の女将長谷川あいの妹蝶と結婚、東屋旅館のそばに開業した。

(16) **先生はきっと珍しかったんですよ**　劉生の妻蓁は前出の **『劉生画集』** に次のような出来事を書きとめている。

「主人が於松の絵に油の乗りきって居た時で、毎日モデルに来るのを待ち兼ねて居た或る日のことで御座います。あんまり前髪が伸び過ぎたので少し切りましたと言って母親に連れて来られた於松の顔を見て私はハッといたしました。前髪が眉の上の方できれいに短く切りそろえてあってまるでいつもの於松の顔と違って居ります。主人は怒り出すし母親は泣くし、大変なさわぎになってしまいました。……しかしあんまり怖がらせてモデルによこさなくなったらそれこそ大変です。その頃私は日本髪に結っていたのでかもじがある事に気がつき、それを使ってとにかく昨日までとそっくりの前髪を作ることが出来ました。」

(17) **丸山先生**　丸山行雄。当時、鵠沼尋常小学校の教師。岸田劉生に師事し、のち春陽会会員。

(18) **時間がくると**　(8)を参照。

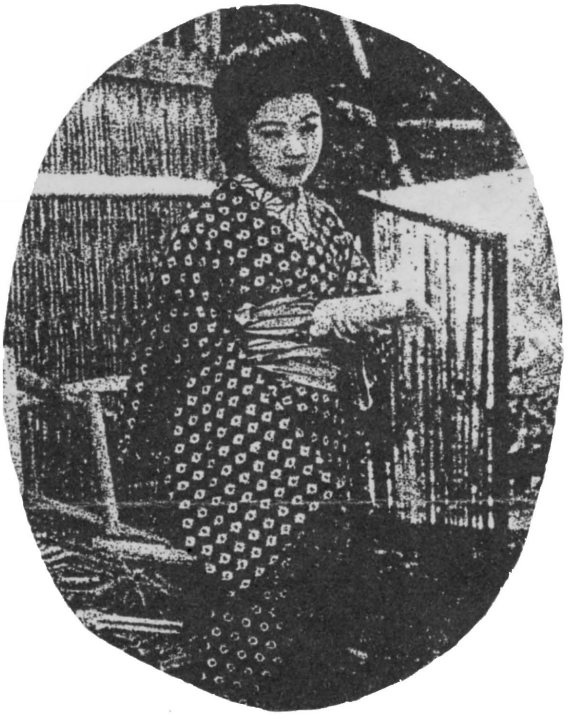
(19) **横堀角次郎**　画家。草土会以来、岸田劉生とは同志的存在だった。のち春陽会会員。

(20) **高砂**　藤が谷三丁目～桜が岡二丁目あたりにあった砂山。北側が川袋の低地になる。今はならされてほとんどが宅地になっているが、ところどころに残っている高みにかつての砂山の面影をしのぶことができる。

(資料調査・佐藤 和子)

講演記録　「『女學世界』に咲いた花
～内藤千代子について～」

講師　森山　敬子
講演日　１９９９年1月３０日
会場　鵠沼公民館



司会　皆様こんにちは。今日は「鵠沼を語る会」の公開講座においでいただきましてありがとうございます。「鵠沼を語る会」は月に一回定例会を持ちまして、ここ鵠沼に関する歴史などを調べております。時々こうして講師の先生をお招きいたしまして、会員だけでなく関心をお持ちの地域の方にもお声を掛けて参加をいただきまして公開講座という形で開催させていただいております。

今日は「内藤千代子を知る」と題しまして公開講座を開きます。今日会場にお見えになった方の中にも内藤千代子という女流作家、かなり有名な流行作家がここ鵠沼に住んでいたということをご存知の方は本当に少ないのではないかと思います。実は私も 10 年前に「語る会」の定例会でそのことを知りまして本当にびっくりいたしました。全く知らなかったのですね。それから私の頭の片隅に気になる存在として内藤千代子がいつもいたのですが、いつかは詳しく彼女のことを知りたいと思い続けておりました。今日は森山さんをお迎えしまして詳しく内藤千代子について知ることができることで本当に喜んでお

ります。

森山さんを紹介させていただきます。森山さんは江の島にあります県立かながわ女性センターで「史(ふみ)の会」という神奈川の県内の女性史を熱心に研究しているグループのメンバーのお一人です。この会は女性センターの出版物であります神奈川県の女性の歩みをまとめました二冊の本、戦前編が『夜明けの航跡』戦後編が『共生への航路』と申しましてこれらは女性センターの代表的な出版物になっております。新聞を丁寧に追っていったり聞き書きをしたりして本当にこまめな作業を積み重ねて二冊の本になったわけですが、それを中心にまとめられたのが「史の会」です。

「史の会」は研究誌を出しておられ、今３号まで出ているのですがその中で森山さんが内藤千代子について研究論文を発表されました。私はそれを見る機会がありまして、ぜひ鵠沼でお話しいただきたいと申し上げましたらお忙しい中こうして時間を割いて来てくださって、嬉しい気持ちでいっぱいです。

それともう一つあちらに内藤千代子に関する資料をたくさん展示いたしました。これは大変貴重なもので内藤千代子に関してこれだけの資料を一堂に集めるということはまずできないことだと思います。この資料は私たちの「語る会」の元の会長であられました塩沢務さんが熱心に時間をかけて収集なさったものなのです。塩沢さんは残念ながら昨年亡くなられ、今日はここにおいでいただいている奥様のご好意とご協力をいただきまして、ここに皆様にご覧いただくことができたことに改めて感謝申し上げます。

それでは公開講座「内藤千代子を知る」と題しまして森山さんに講演をお願いいたします。

森山　ただいまご紹介いただきました森山でございます。よろしくお願いします。

（ここで内藤千代子の住んでいた場所について故塩沢氏が作られた地図をもとに「語る会」佐藤会員より説明。）

佐藤　現在の鵠沼の商店街を江の島方向に歩いて、有田商店の角を左に入りまして踏切を越えますと最近までそこに榊原さんという大きなお宅がありました。今は細分化されて同じような色のお宅が何軒か建っています。そこを通り過ぎた一角に内藤千代子が住んでいたと私が教えられたところがあります。ちょうどその手前の駐車場のところに、かって岸田劉生が３ヶ月ほど住みました「佐藤別荘」

があります。近くに劉生の作品「村娘」のモデルになりました川戸マツさんもこの近くに住んでおられ、麗子の友達になり有名なあの絵のモデルになったわけです。そのおマツさんから直接お話をうかがった時にも内藤千代子の家はすぐ近くだったとおっしゃっておられました。

森山　一言お断りをしたいのですが、私は藤沢に来ましてもう大体３５年位になりますが、この鵠沼という街を詳しく存じません。むしろ今日は私のほうが皆様にいろいろ教えていただきたいと、そういう気持ちでここに参りましたのでどうぞよろしくお願いいたします。それからこういうところから皆様にお話をするということにはあまり慣れておりませんので、お聞き苦しいところもあるかもしれませんが、その点はご容赦ください。

まず最初に私が内藤千代子について論文を出したというのはこの『史の会研究誌』でございます。たまたまこれを江の島の女性センターの図書館に寄贈しましたのでお目に留まったものと思います。

私が内藤千代子に出会ったというのもここにありますご本、小山文雄さんの書かれました『個性きらめく～藤沢近代の文士たち』、あのご本によって私は千代子の存在というものを初めて知りました。この本は市政５０周年記念の藤沢文学展「個性きらめく～人と作品」の時に同時発行の形で出されたご本ということです。私はその文学展にはたまたま風邪を引いてまして伺えなかったのです。それが自分自身本当に残念で後でこのご本を買いまして見ましたところがそこに千代子が存在していたということです。



講師　森山　敬子氏

内藤千代子という名前、これは今でも通じるような大変ナウい名前と思うんですが、私はそれを全く知りませんで、見ていましたところ今井達夫さんの文章などが出てきまして「吉屋信子に匹敵するような」という言葉がありました。吉屋信子といいますとちょうど私などは女学校に入った年代でございますから、もう学校の授業そっちのけで机の下で隠しながらみんなで回し読み

したのが一番は吉屋信子さんなのです。そのようなわけで「吉屋信子に匹敵」というのにちょっと驚きまして、しかもその人がこの鵠沼という土地の文人の草分け的存在ではないかという、そのことにもまた驚きました。しかもどうして吉屋さんのような作家でいらした方の作品が全然耳にも目にも伝わってこないのかそのへんの不思議さにまず捕らわれたのです。

そこで女性人名辞典であるとか古い新聞であるとか繰っていきましたところが、そこに出てくる言葉がみんな謎めいているといいますか「もう消えてしまってない」とか、それから作品にしましても駒場の近代文学館まで行ってみましたけれども何冊もないのです。国会図書館でも二冊くらいしかない、駒場でも二冊くらいしかない、神奈川の近代文学館では全くございませんでした。『女學世界』は欠号はあるものの神奈川の近代文学館にもございます。そういう風で非常に不思議な存在、しかも出てくる写真で見ますとここにもありますけれど、大変な美人なんです。

なぜこういう人が消えてしまったのか、しかも年齢が３１歳、これは今満年齢で申し上げていますけれども、で亡くなった、どうも家族中で結核を患っていたという感じがあるのです。それでも母親だけは健康を保っていたようで千代子が亡くなった後も母親は８年か９年は元気でいたようです。そのように面影からもそして名前からも色々な点で不思議な存在でどうしても調べたくなったとそういうことなのです。それが出会いでございます。

それからもうひとつ、レジュメにもありますが、映画と講演の会として「近代鵠沼の文士たち」というタイトルでこれも小山文雄先生なのですけれども、この会場で講演をなさいました。私も千代子をやろうという気があったものですからそこに参加いたしました。千代子はその講演のほとんどもう終わりの頃に登場してきたわけです。その会場にたまたま小山先生がおっしゃるには「千代子の研究家としてはこの人を措いてはないとう感じの塩沢さんがこの会場にいらっしゃいます」ということで、塩沢さんはちょっとお立ち下さってご紹介があったわけです。私は塩沢さんからはちょっと離れた位置におりましたが、その際よくお顔をインプットしておき、その会が終わった時に飛んでいきまして、名刺も何も持っておりません、しかたなくノートを破ってそこに名前などを書いて「こういうものなのですが、実は内藤千代子を調べたくて」ということを早口で申し上げました。私の不躾にもかかわらず気持ち良くその話を聞き届けていただきまして、そ

れから一週間くらい後の日曜日をお約束しましてお宅に伺ったわけです。非常にたくさん資料をお持ちだということもその時にうかがったものですから、もう小躍りするような気持ちで伺いました。

そこで本を見せていただいたりお話をお聞きしたりすることができたのです。私が塩沢さんから教えていただいたのはその日一日だけではございません。それからも二、三回、全部で四回くらいお伺いした記憶がございます。非常にご親切にいろいろ教えていただきました。それで何とかかんとかまとめられたのがここに書いてある論文だったのです。これ等が千代子と私の出会いでございます。

次にレジュメに付けている「千代子の略年譜」にしたがいまして説明したいと思います。

千代子は1893年、明治の26年になりますが12月9日内藤広蔵、いくの長女として東京下谷西町、現在の台東区東上野に生まれました。兄が三人いたらしいのですが全部幼児期に病没しているという、これが全部結核系の病気であった様子です。父は象牙の彫刻師で士族出身、この彫刻師というのが象牙であれ金属であれ没落士族といいますか、そういう方達のなりわいとしては非常に多かったようです。あと同じような職業に彫金師とかもあったようです。父、広蔵はその一人であったということです。そういう身分でありましたから千代子のお父さんは自分自信が漢籍の素養もあって、かなり教養の高い人であったと言えるようです。

鵠沼には一家をあげて知人の別荘に東京から移ってきました。その別荘から翌年、本村の農家の離れを借りて移ったとあります。そしてここにしばらくおりました。千代子が5歳の時（明治31年）妹かめが誕生しました。このかめという名前、千代子とはちょっと違いますよね。なぜかと申しますと千代子がずっと小さい頃から可愛がっていたお人形が「つるちゃん」という名前の付いたお人形だったそうです。だからもし妹なり弟なりが生まれたらこの「かめ」の字を付けてくれと、それが千代子の願いだったと『生ひ立ちの記』に書いてあります。というわけでかめということになりました。

この年から先程申し上げました父親の手で千代子の教育が始められました。不思議なことに千代子はこの後学校教育というものを全く無縁に過ごしているのです。ただの一度も学校というものに行っていないということです。当時はまだそれでも許されたということかとも思いますが、父親が大体若い頃から身体が弱かった、それで男兄弟が三人ともみな死んでしまった。そしてやっと生れた千代子、

その千代子も決して強い性質(たち)ではない。そういうこともあって、この本村から小学校、現在の鵠沼小学校であると書いてありますが、そこまで行くことが今で言う２キロですか、半里の余と書いてありますから、そのくらいの距離があるので小さい子にはとても無理ではないのかと親が思った、そしてまた千代子はものすごく物覚えのいい子でこの五つの時から勉強を始めて学校へ行く、満年齢で言うと６歳でしょうか、その頃には小学校二年位の過程を全部マスターしてしまっていたというのです。だから今更行っても仕方がない、むしろ親としては自分の手元で何とかしたいという気がどうもあったようで、行かなかったという事です。

ところが千代子にしてみるともう近所の子供達と同じように自分も学校に行きたいという思いが積もり積もってそれで心が鬱々していたけれども、親の言う事というのは絶対命令みたいなもので、当時としては我が侭を言う事はできなかった。そのことが千代子にとってはずっと自分の胸の中で鬱積してあとでは「袴と御被布そういうものは自分にとっては生涯のあこがれでございました」というような文章になって現れてくる、そんなこともあります。

そして明治 34 年８歳になった千代子は新築成った自宅に移る、これが今ご説明をいただいた鵠沼松が岡３丁目であるということなのです。実は私もそれをまだ確かめに行っておりません。一度行ってみたのですけれど、全然土地感のない私にはどこが何やらさっぱりわからずに帰ってまいりました。ですから今度はもう一回ちゃんと行ってみたいと思います。

この住居がもう千代子にとっては一生涯そこに住み続けた住居になるということなのです。１３歳の時にこの父親が肺結核で亡くなります。７月に亡くなって９月、もうお父さんの目もなくなった、それで教育を施すものもいないということで妹かめは村の小学校に入学しました。そのとき千代子はどうしていたかというと、お裁縫を習いに近所へ行っていたらしいのです。母親としては父親がもう寝たり起きたりの生活で、仕事は彫刻師でそれほどの収入があるわけではないこともあり内職を一生懸命励んでいました。それに少しでも手伝いになったらという気持ちもあって、裁縫を習いに出していたとこういうことのようです。一度はこの父親は、亡くなるちょっと前ですけれど、養鶏に手を出しています。しかしそれも素人の悲しさで、設備の不十分などから鶏に病気をいっぱい発生させてしまってその仕事は駄目になってしまいました。千代子はそこで一つの役割を受け持っていて、それは卵を毎朝別荘のお家を回って売るという仕事をしていました。ところがそれが千代子はいやでいやで仕方がなかったので、鶏の世話は大好きだ

けれども、むしろ駄目になって自分はほっとしたということも『生ひ立ちの記』の中にでてきます。

このお裁縫の稽古、これは千代子にとって本当にやりたくないことだったようです。すでにこの頃には大変な読書熱というのですか、それに浮かされていまして父親の目をかすめて読む、もう父親が亡くなってからはおおっぴらに宿題が出ようが、何しようがそれはさておいて本にのめり込んでいたようです。

その頃に『女學世界』の「閨秀文壇」という号が出まして、それは増刊号だったらしいのですが、その中で「我と思わんものは書いてみないか」という誘いの文があって、これだ、という気持ちがあってそこで自分も何か物が書けるのではないかという気になって少しずつなにかを書き溜めていきました。

１５歳の時に「田舎住ひの處女日記」、これが『女學世界』のやはり増刊号ですが、懸賞日記文を募集した、それに出してみて３等に入ったわけなのです。そうすると賞金も１０円もらえました。当時の１０円、私にはちょっと分かりませんが大変なものだったようです。１等が３０円、２等が２０円でこの３等が１０円、そしてこの１０円が大変家計の足しになったとも書いています。じつはこの「田舎住ひの處女日記」を出すちょっと前にもう一つ、これは佳作になった、何というのですか投稿欄みたいなものが『女學世界』にありましてそこに出した「或る夜」という作品があるのです。

『或る夜』（「女學世界」８巻１４号）

病苦の疲れに、母君はよく寝入り給ひぬ。そと、御寝顔、うかがひて我にもあらず太息つけば、湯と蒸す玉の、ホロホロと膝にこぼるる、あヽ父君失ひし身には、天にも地にも只ひとり頼の母君を、三月越のこの御病気、妾は疊の上に得たへぬまで、あやしき胸さわぎを、おぼゆるなりき。あヽ世の中にかかる別れのなくもがな、蝉の聲、身にしみつ、思わず袷かき合わせて、二分心の心かき立つれば、ぱっと壁にうつる我が影の、髪も何の形かわかぬまでに、亂れたる、あはれ、小櫛取る間もなく、看護の間間に人の衣縫うに、虫は小やみなくつづれさせぞと、うながすなる。

こういう文章を書いているのです。これまだ１５歳ですよ、すごいものです。『生ひ立ちの記』の中で千代子が自分は泉鏡花が好きだ、だから鏡花に似せて書

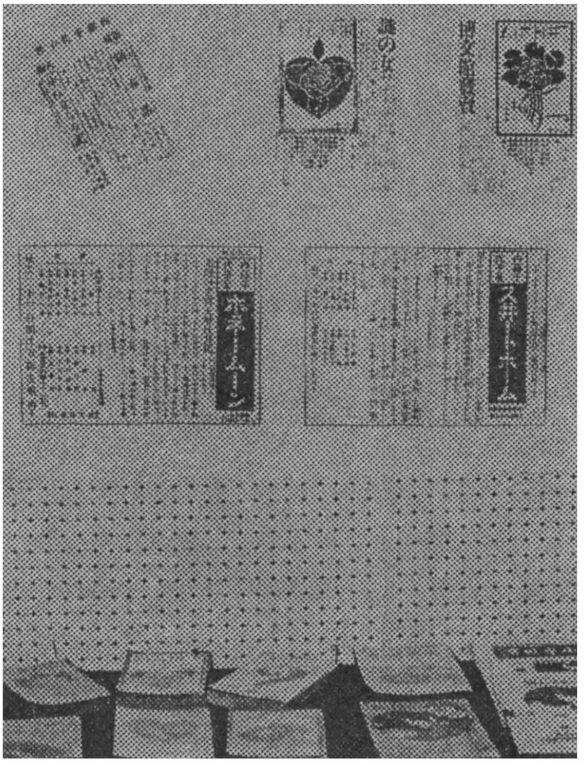
く、ということを書いているのです。そのとおりに美文調の擬古文といいますかそういうもので、これがどうもかえって当時の読者の心を掻き乱したというか、握ったといいますかまるでローレライの怪しき歌声みたいにどうも人の心を掴む魔力があったようなのです。

次をご覧くださいこれがその３等に入賞しデビュー作となった『田舎住ひの處女日記』です。

『田舎住ひの處女日記』（「女學世界」８巻１８号）

何の縁あってか此の相州の片田舎に十年餘り住みなれて、花やかな都にあこがれ女學生さん達を羨んでいる妾。まだ戀と言ふ物も知らねば筒井筒振り分け髪の床しと慕ふべき君も持たぬが、これも亦一興とその一節を左に。

これはもう全く冒頭の部分だけです。これから裏の畑に出て瑠璃色の茄子を取ってそれを朝のお味噌汁にしてというところから一日のことが始まって、お昼頃になって近所からかるた会のお誘いがあって、もう午後はそのかるた会のことで頭がいっぱいで、何を着ていこう、何の帯を締めよう、この間自分が縫ったあれはどうか、などといろいろ考えて、夕方になって御風呂に入ってきれいに磨き上げて、もうこの頃から水白粉（おしろい）と申しますか、水で溶いたおしろいをはけで首から上を真っ白に塗って、きれいになってそのかるた会に出掛けたという事が書いてあるのです。



展示資料の一部

その文への編集部の寸評み

たいなものがありますので読ませていただきます。

（『田舎住ひの處女日記』に対する編集部の寸評）

平々凡々の事を書いてこれほどに読ますは尋常の業にあらず、彼の秋濤は描き易く春月は寫し難しのたとへ、その原稿を見れば手蹟の不つつかなる、小學校の生徒さへかくまでは拙なからずと思はるほどなるに、其の文の堂々たるは詞壇老将も舌を巻くべきところあり、これが田舎に埋もれたる無名の女子かと思へば、眞に悼ましい心地す、描寫は細に入り天眞流露して筆に同情多し。

この時の編集部に『冒険世界』の方から移ってきました河岡潮風、これは号ですが、という人物がいました。まだ若い人なのですが、早稲田大学を出まして大隈重信さんに大変目を掛けられていて、書生ではないのですが自由にその自宅に出入りをしていたというようなことが彼自身の作品に出てきています。このひとが内部の人事異動で『冒険世界』から『女學世界』に移ってきている、潮風が『女學世界』の編集を初めて手掛けた頃だったのです。そこにこの内藤千代子が応募したものが来たということです。「筆に同情多し」と書いていますが、その同情心の固まりみたいになった潮風はこれから千代子にものすごくアタックすることになります。それは「何とか自分の手であなたを育てたいんだ」という心情の表れみたいな形で出てきます。外からみますと週末になると必ず鵠沼に潮風の姿が見えて、夕暮れ時になると潮風を送った千代子の姿がまた駅にいると、そういうのを見ると皆さんはそれを恋人同士というように噂をした、ところが千代子自信は「私はあくまでも処女主義である」と「そういった男と女の関係などは私は持たない、持ちたくもない」というようなことを綿々と書いているような文があるのです。ですからそれはどっちかよくは分かりません。

ここでもって潮風と出会うわけなのですが、千代子のデビュー、それに続いてすぐ今度は２等を取るのです。年表をご覧ください。1909年（明治42年）です、１６歳の千代子は「嫁に行かぬ人」これで２等入選で、この時は１等が５０円、２等は３０円という大分高い額になりまして、それを獲得したということがあります。

この「嫁に行かぬ人」を千代子が書いた時の『女學世界』の増刊号のタイトルは何と「嫁に行く人」だったのです。ちょっとひねくれている感じはするのです

がこれがいわゆる千代子の「自分は絶対生涯処女主義を貫く」という主張の表れだったようです。

次に１７歳のときには「思ひ出多き函根の湖畔」これを書きましてとうとう念願の１等を取ります。賞金は５０円。１等を取ってこれからは『女學世界』の毎号に作品が掲載されてきます。これらの作品については千代子は内藤千代子あるいは内藤千代という本名を使って登場してきています。そして大変な寵児になっていくわけです。

私はここで不思議な事に気がついたのですが、千代子はものすごくたくさんのペンネームを使っています。レジュメに書きましただけでも萩香、金子百合子、神田千鶴子、松嶺晴子、山百合、まだまだあるのです実は、玉露であるとか初雁であるとか、でもそれは私自身がしかと千代子であるという証拠をつかんではおりませんので、つかんだものだけでも前に述べたようなものがこれだけございます。なぜこんなにたくさんのペンネームを持たなければいけなかったのかというのも、疑問視しなくてはならないところかなと思いますので、皆様頭の隅に留めといていただきたいと思います。また後でこの話が出てまいります。

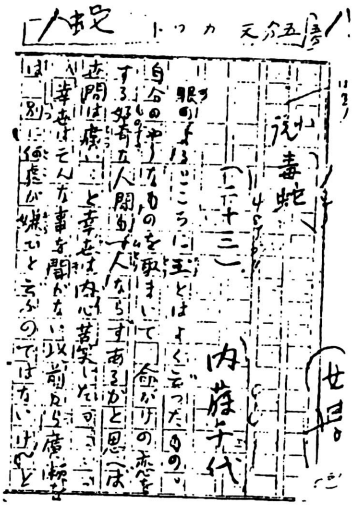
ここで千代子がデビューを果たしました『女學世界』という雑誌についてお話したいと思います。この『女學世界』といいますのは博文館、今では日記や手帳でしょうか、そういうものを作っていて今も残っていると思いますが、当時は大変な隆盛を誇っておりまして月刊誌もかなり出しておりました。この『女學世界』というのは当時の博文館の中でトップを行く雑誌になった時期もありました。

数字がちょっとわかりましたので申し上げますが、普通の月刊誌というのはまあ２千から３千、よく売れるものでせいぜい７千から８千部だったというのです。その時に『女學世界』の一番売れ行きの良かった時期は７万から８万を売ったというのです。だからいかに大変なものだったかお分かりいただけると思います。その７万、８万売ったという時に活躍していたのが千代子なんです。しかも一号の中に本名で堂々と二つくらい出して、あとはペンネームでもってまた出している。だから一人で作品が四つも五つも並ぶということもあるのです。このことも私にとっては非常に不思議なことでした。

『女學世界』は1901年（明治34年）ちょうど年号が都合がいいのですね、1901年に創刊号を出したということですから、何巻の何号という何巻といいますとそ

れがこの年号とぴったり合うということなのです。そして終刊は 1925 年ですから大正 14 年、この時に終わっています。これが終わるというのには時代の流れというものが出てまいります。







千代子が一躍アイドルになったというところまでお話しましたけれども、レジュメに「誌友倶楽部」というのが書いてあります。この「誌友倶楽部」というのは『女學世界』の“仲良しクラブ”のようなものですね。何か小説なり何なり自分が気に入ったものがあるとすぐにそれに対して投書をして寄越す、そういう人がいっぱいいたわけなのです。今みたいに情報もありませんし、楽しみもないですから、当然このような結果になると思います。しかも若い女性、この『女學世界』という名前からのイメージは何となく女学生を相手にするように思いますが実はそうではありません。もうちょっと年齢は上かと思います。ちょうど結婚適齢期あるいは結婚したての女の人たち、そういうような人がどうも対象となっていたようです。ですから千代子の書くような本当にホットなホットな熱い男女の仲みたいなことを書かれるとそれが非常に良かった、と同時に虐げられた女の生活その女の生活を慰めるということにプラスアルファーでそこに愛というものを加えると読む人の心の大きな慰めとなるという、その感じが千代子が読者のアイドルになったその大きな理由のように思います。そしてこの「誌友倶楽部」にはちょっとした特徴があります。いろいろ書いてきて、本当に恋文まがいの「ああ、お懐かしき千代子様．．．」で始まりまして、必ず最後には「お振ひあそばせ」という言葉でだれもが終わるわけです。「お振ひあそばせ」とは「筆をお振るい

あそばせ」という意味なのです。この言葉はなかなか力があるんだなあと感心して読んだことでした。

もう一つの資料をご覧ください。「誌友倶楽部」からのご紹介なのですがこういった調子で出てくるのです。

「誌友倶楽部」より（『女學世界』11巻10号）
「青葉の蔭」（千代子の作品→講演者注）なつかしう拝見致しました。「上京してすでに二ヶ月、思へばわづらひ多き人生にさふらふかな…」とある初めを読んだゞけで、私はもう何とも言はれぬ感に打たれました（中略）どうぞ来月もお振ひあそばせね。　　郷士柳子

とこうくるわけですよね。ですから千代子のこの文章に惚れて惚れてという人たちも出てくるし、また逆に批判の「誌友倶楽部」の便りがなかったわけではありません。「千代子様あなたはどうしてこういつも甘いのでしょう、私はもうちょっと塩辛いのが好きよ．．．」などというのもあります。ですが大体は本当にラブレターまがいのものが多かったと、そういう感じなのです。

そして今度は周辺の人々のことに移ろうかと思います。
まず先程ちょっと出しました河岡潮風、本名は河岡英男といいます。『五五の春』という本を五五＝二十五でちょうど自分の２５歳の誕生日を記念してこの本を出しました。その本がそこに展示してあります。『五五の春』漢数字の五が二つ並んでおります。どうぞ後でご覧ください。
そのなかに潮風が自分で頼んで撮ってもらったという写真があります。この人は宿痾のように脊髄カリエスを抱えているのです。ですからすっかり背骨が曲りまして、頭から上半身を撮りますとＳ字型になっている、その写真を裸でもってわざわざ撮ってこれに載せております。その身体にコルセットを巻きまして、それでずっと博文館の編修部へ仕事に来ていました。ですから千代子の恋人といい条、はたしてそういう男女の関係が持たれたかどうかということもちょっとクウェスチョンが付くかなとも思います。この『五五の春』を出してもう何ヶ月も生きてないのです。その脊髄カリエスに脳膜炎を併発しまして、併発してからはもうすぐに亡くなります。ですから潮風は２５歳で亡くなったことになります。も

う一つ潮風について述べますが、大変な論客であったようです。早稲田の弁論部に籍を置いたりしておりまして、できることならば政界に打って出たいくらいの気概は持っていたようです。しかし自分の身体がもう言うことを聞かなかったということです。彼はそういった方面ではかなり高く買われた人間でもあったようです。

次に書いております松平鏡子、この人の本名は北川千代または北川千代子、結婚しまして江口千代子となります。江口千代という名前でお気づきの方もあるかもしれませんが江口　の妻です。

少女小説『絹糸の草履』というのをお読みになった方もあるかと思いますが、大変暖かい目で貧しい人たちを見るという作品でした。ですから登場してくる主人公も決してそんなお金持のお嬢さんが主人公になるわけでも、うんと美人の女の子が主人公になるわけでもありません。むしろ反対にどちらかと言えば日の当たらない女の子達が主人公になっていく、そういう小説を書いた人です。

そして後には「赤瀾会」女の社会主義グループとしては始めての「赤瀾会」にも参加しています。これは江口　の影響もあると思われます。

この人がなぜ千代子の周辺の人々の中に入るかと言いますと、もともとはこの松平鏡子、松平千代子という名前でもって『少女世界』に書いておりました。この『少女世界』というのは沼田笠峰という主筆がおりまして、この沼田笠峰が大変な教育者で、このひとの奥さんも大変な教育者でした。御夫婦で当時いろいろ投稿したり、なにかを『少女世界』に書いたりしている、そういう人たちを育てようという姿勢があった。彼等は「たかね会」を主催してそこで子供達を育てていた。そのメンバーにこの松平鏡子、そしてその次に書きました森田たまも入っているわけです。

これも一つの出会いかとも思いますが千代が入ったほうは『女學世界』で、ちょっと年齢が上でどちらかというと恋、あこがれ、そういうものをメインにして書くことをよしとした。千代子はそれが得意ですからまあ売れに売れたわけですが、自分を育てるという機会にはここでまた恵まれなかったということが言えるのではないかと思います。

松平鏡子も森田たまもこの沼田笠峰のもとでかなりの修行を経てきたというわけです。

潮風は先程申しましたように早々と亡くなります。そうすると潮風しか千代子

の面倒を見る人がいなかったわけなのです。だいたい学校教育というものを受けていません。千代子が師としたのは自分が選んで勝手に読んだ本とそれから父親と、そしてこの潮風とこれだけしかいなかったわけです。ですから潮風死後の千代子というのは非常に可哀相というのか、悲劇の道を歩くしかなかったように思われます。

略歴の方をご覧ください。1911年（明治44年）千代子１８歳の９月初の単行本『スキートホーム』が出ていますが、ここの発行人に河岡勝で刊行と書いてあります。この河岡勝さん、発行人の住所もみな書いてありまして、それを調べましたところ、間違いなく河岡英男イコール潮風ということになりました。『生ひ立ちの記』の中にK先生というかたちで出てくるのがこの潮風です。ともかく自分の手で育てたいと綿々と訴えたその潮風の心に打たれて千代子は「お任せします」と言います。母親はもちろんのこともう願ったり叶ったりという感じなものですから．．．。そしてこれまで親戚が２０円というお金を毎月千代子の家に出していたのですね。親戚一同でもってです。父親がいませんし、働き手といっては母親と千代子、そしてまだ小さな妹がいます。ですから収入が足りないので親戚が面倒を見ていた、その面倒見を潮風が肩代わりしているのです。千代子としてはそれに対して何も言うことはできないし、自分は鵠沼というところにひっそりと生きていたので、何も知らないわけなのです。帝国劇場も行ったことがなければ、その時どういうものがあるか、東京にはどういう図書館があるのか、そんなことも一切しらない、それを全部手取り足取り教えてくれたのがこの潮風であったわけです。だから千代子にとっては潮風はもう太陽のような存在でありました。ですから潮風の死が千代子にとってどれだけの打撃であったかお分かりいただけると思います。

タイトルが『スキートホーム』であるとか『ホネムーン』であるとかちょっと今風な片仮名書きなんですね。さきほどちょっと読みましたが、千代子のああいった流麗な感じの文章、そしてタイトルがちょっとモダンでしかもなにか口触りのいいような、そういうものが千代子がどんどんとアイドルになって行く要素であったかと思われます。

そして１９歳の時です、1912年（明治45年）ですね、潮風の死のちょっと後です。大阪毎日新聞から「千代子の取材をしたい」という申し込みがありました。

その取材というのがそこに書いてあります「謎の少女～鵠沼の千代子訪問記～」ということなのです。実はこの訪問記は千代子一人ではありませんで、その当時新しい女の集まりとして世の中を騒がせました『青鞜』平塚らいてうの「原始女性は太陽であった」というあの『青鞜』の尾竹紅吉、この人は女性です。身の丈が5尺6寸、目方が１６貫５００あったと言われますから大変大きなパワー十分の、誰が見ても美少年という感じの面影だったようです。その人と二人並べまして「謎の少女」ということになってこの取材が来ているのです。この二人を描きましたものがちょっと面白いのでご紹介してみます。

『青鞜』の尾竹紅吉と『女學世界』の内藤千代子、最初は紅吉のほうを訪問し後で千代子のほうに来たようです。

最初に断り書きがあります。「東京の女流文士界に謎の少女が二人ある。一人はこの春から女流純文芸雑誌と銘打った『青鞜』の社中に現れて、最年少の暴れ者とうたわれている尾竹紅吉、一人は両三年来、雑誌『女學世界』の愛読者という女学生達にやんやと称えられている妙齢の内藤千代子である。」とこういうふうに書き出しています。

そして千代子のことは大変な誉めかたなのです。紅吉のほうは美しくない女であると断言しています。ところが千代子のほうは大変に美しい女である。お化粧もきれいにしている。紅吉のほうは何もお化粧をしないでただざぶざぶと顔を洗ったばかりのような状態であると。紅吉は何でもしゃべってしまう、千代子は本当に寡黙でろくに口も開かない感じがする。だから非常に謎めいて感じるのはどうしても千代子に分があるのではないか、そういうようなことを書いています。

またこの訪問記の中で実は千代子がちょっと大変な発言をしているのです。

「謎の少女～鵠沼の千代子訪問記～」（大阪毎日新聞 1912. 11. 25)

青春の恋をなぜ唯一の材料にするかとおっしゃるのでご座居ますか、他に材料がないからなのでご座居ます。これはうそも隠しも致しません所で、妾等の境遇では何を描こうと申しても致し方がご座居ませんからあんなやうなものを描く、それももう描きやうがなくなって仕まい近いうちに筆をすてなければなりますまいかと思っております。

こういうふうに言っているのです。これには千代子自身も結核がありますので

身体もしんどかったのかもしれません。ですが潮風の生前に「いかにもあなたは眼界が狭すぎる。経験が浅いからだ。今のうちに早く方向を変えないと読者に飽かれます」ということをきつく言われております。そのことも自分の頭にしかと入っていたかと思います。

これからいよいよ千代子が独り歩きを始めるところにいきます。1913年（大正2年）千代子は二十歳になっています。ここで「一身の革命」というタイトルで『女學世界』に書いています。「一身の革命」いかにも自分の庇護者であった潮風がいなくなってこれから自分はこういう決心で動くのだぞ、というものがしっかりとここに表れています。

この「一身の革命」が2月ですが、この年の5月になんと『女學世界』は発禁処分を受けています。この発禁処分はなぜかといいますと、家族制度を破壊し、また風俗壊乱により発禁処分とすると、こういう理由で処分を受けたのです。風俗壊乱などと言われましたら千代子の作品はもうともかくラブラブラブですよね、恋を謳歌するという作品なものですからもうとんでもないということになります。これは大正期に入りましてみんなの気持ちが、モダンボーイやモダンガール、ああいうこともありまして華やかになりすぎたということへの締め付けであるということもありますし、それから女性が『青鞜』を通したりしまして、「新しき女」という意識を持ってそれも謳歌されてきたということがあります。ちょうどこれと同じ時期に平塚らいてうが書いた『円窓（まるまど）より』、それも発禁処分になっているのです。らいてうさんは強い人ですから発禁処分を受けても黙っていません。すぐに悪いと言われたところをちゃっちゃと消してまたすぐに発刊します。それは何とか認めれた。ちゃんと言葉の言い回しを気を付けてなぜ発刊禁止になったかというようなこともちゃんと書いています。こういう時代の流れがどんどん押し寄せてきています。

２１歳の時に『生ひ立ちの記』を書きます。この『生ひ立ちの記』もそちらに展示してあります。『生ひ立ちの記』は千代子が生まれた時からの半生の自伝で、この本には鵠沼の風物もよく描かれております。このことは小山先生も確かおっしゃていたと思います。

それから２２歳の時に『惜春賦』を出します。このとき『女學世界』の15巻の8号から「毒蛇」の掲載がいよいよ始まりました。この「毒蛇」はちょっと措

きまして次に『冷炎』が出ます。この本もそこにございます。この『冷炎』のなかには日本アルプス、穂高岳に登ったという記述があります。どの辺まで本当に登ったのかはちょっと分かりませんけれども、もしその登頂が本当であれば、これも女として穂高岳にこの時期に登ったということであれば、大変画期的なことではなかったかと思われます。

そして２６歳で『春雨』が出ます。そして「毒蛇」なんですがこの「毒蛇」に描かれる世界もこれまでの『女學世界』に書かれていたものといっこうに変わりませんで、女性を描く、その女性が全部自分の身の回りの人物、母親だったり妹であったりしたり、お裁縫の友達だったりその人たちがモデルなのです。それにからんでくる男性は必ずと言っていいほど一高あるいは帝大の学生、でそこに華族階級の人がちょっと加わって来る。もうこのパターンはワンパターンなんですね。「誌友倶楽部」の中でもかなり「もう私飽きましたわ」などという表現が見えてきたりしています。

どういう理由かはっきりとは分かりませんが、時代の流れということも大いにあったとおもいますし、なにしろ病弱な千代子でしたから病気が重くなったのかもしれない、ともかく『女學世界』での「毒蛇」は未完のままに終わっています。「毒蛇」の掲載が始まる前には、もう大変な宣伝だったのですが、ところがこれが終わるという通知は一切無いのです。私はかなり丹念に『女學世界』を繰ってみたのですけれど全くありません。そしていきなり他の方の「家庭小説」と銘打ったものが出てきています。

『春雨』の最後の部分をご覧いただくと分かるのですが、蛇にかまれて主人公、ヒロインが亡くなるのです。そのあとで『毒蛇』が三徳社というところから、多少増えまして、未完のものは３７章で終わっていたのですが、この本はちょっと変形のＡ５判という本でございますが、それで６０ページ分足しまして４３章で完結として単行本が出ております。その中でも千代子のこと、まあ幸代という主人公ですがこれはもう全く千代子自身と思ってもよいと思いますが、その幸代はともかくメデュサみたいな、ギリシャ神話でいうメズッサですよね、蛇の化身みたいな女だと、だから彼女に関わったら全部それが取り殺されるというようなことが書かれていたりします。そして千代子自身が書いているのに「自分は巳年である、そして非常にしつこい性格なのだ」とこういう記述もあります。そしてクレオパトラのことをたびたび書いています。クレオパトラも毒蛇に自分の手首を

噛ませて死んだ。だから何か蛇というものにあこがれを持っていたのかなと、よくは分かりませんがこの『春雨』と言い『毒蛇』と言い、千代子の干支と言い、クレオパトラと言い全部蛇、蛇、蛇で来るのです。

この三徳社から出た単行本の『毒蛇』これをもって千代子は社会的な場所から全く消えてしまいます。全然もう何も書いておりません。かなりの冊数の本を出している、二十歳のときにすでに3冊も出している。こういう人は当時としてはごく稀であったと、森田たまの『随筆貞女』という作品の中に書かれています。この頃森田たまも北海道のほうに結婚した相手を残して上京してきてしまって、もう自分はそこに帰りたくないなどという思いがあったりで、「もしかして私は死んでしまおうかしら」などとと思っていたそうです。たまたまお茶の水の方の橋の上に二人立って、千代子と交流があったものですから、繊妍と流れる川の音を耳にしながらいろいろ話し合った時に「私は死にたい」ということを森田たまさんが言うと、「私は絶対石にかじりついても生きて行く」ということを千代子がはっきりと言ったということです。

その「石にかじりついても生きて行く」という言葉を『生ひ立ちの記』で書いているのがちょうど潮風の告別式から帰ってきたときです。千代子は世間からああだこうだ、読売新聞にはいろいろと潮風の告別式の事が書いてあり、そこに展示もされていますが、いろいろ言われた時期でありました。そういうものに対する「世間への挑戦」の発言だと思います。

それを森田たまが聞いて、もし千代子がそこで「私も死にたい」と言ったら、あるいは死の方向へ動いたかもしれない、だけれど幸いに相手が「石にかじりついても生きる」というしっかりした信念を持った人、「生活派」という言葉を使っていますが、であったおかげで私も死なないですんだ、というようなことがこの『随筆貞女』に書かれております。

いよいよ最後のところになるのですが、大正12年24歳双生児の姉妹を出産。出産ということは千代子がどこかで結婚しているわけなのですが、その結婚に対する記述は全然見つかりませんでした。実は早春（そうしゅん）という長男もいるのです。これは私が千代子の墓に行ってみまして、そこに長男早春と書いてあります。ですから千代子がそこに収めたということなのですから早春の誕生前に結婚をしているはずなのですけれども、それがちょっと調べられません。

高木先生（「語る会」会長→編修部注）の著書の中にS博士、佐伯さんとおっ

しゃって栄養学校のほうの先生であった博士号を持った方ですが、その方のむしろ二号さんのような存在になってしまったとあります。千代子は知らずに結婚したのだけれども、結婚してから相手に奥さんがいることが分かってとうとう入籍はしないままで終わったというように書かれておりました。

この姉妹についてもわりとその後大きくなった頃が書かれていて、お姉さんは大変な美人であったと、琴がものすごく上手でお家で琴などを教えていらっしゃったという話もあります。二人とも藤沢高女、今の藤沢高校ですよね、あそこの出身であるというように書いてあります。妹さんは割と長くご健在であったんではないですか。塩沢さんはお手紙をお持ちでした。

会場から発言（秦さん～内藤千代子の次女の友人）

お姉さんは学校卒業してからじきに亡くなりました。妹の光子さんは３５か６で結婚されて３人のお子さんがありました。前に住んでいた家を売って鵠沼海岸の羽坂耳鼻科医院のすぐそば住まわれていました。今はお子さんと一緒に東京にお住まいで健在と思います。今お話を伺うとその妹さん、光子さんと千代子は性格も良く似ています。

森山　私が見せていただいたお手紙にはご住所、南青山と書いてありました。やはり地域でお話していますとこういうことも伺えて、本当にありがたい事です。



３１歳で1925年、大正14年の３月23日に肺及び咽頭結核で千代子は没します。この時に今お話のありました双子の姉妹が２歳です。そしてその子らと、母親と妹と女ばかり残して稼ぎ頭の千代子はここで消えました。鵠沼神明の万福寺に千代子のお墓がございます。これは生前に千代子が建てたものらしくて、初めは横に朱書きでまだ生きているということで千代子と書いてありました。それが現在では朱が消してあり

ます。

ここからが重要なことなのですが、なぜ早々と亡くなった千代子の後を追うようにして作品まで消えたかということです。これまでの話で大分お気づきかとも思いますが、千代子の作品自体、千代子の眼界が狭すぎてそこから発展性がないということ、底の浅い作品であったと言えるかもしれません。恋に恋するようなストーリー、そして流れるような美文、それに酔わせるというのが千代子のお得意とするところだったけれども、その酔いも覚めたということでしょうか。

そして時代がどんどんと変わっていっております。やがて大正から昭和へ入っていきますが、軍国調のなかでは千代子の生きていきようもなかったかとも思われます。

そしてもう一つ、欠くことのできないことと思いますのは女子教育のあり方があったと思います。当時同じように女家族でもって生きていた何人かの有名人がいるのです。それがどういう人たちであったかと言いますと日本画家の上村松園、あの人のお母さんとの二人の関係というのはいろいろなところで女だからという理由で松園が苦しかった時にいつも蔭になり日向になりかばっていったのがそのお母さんです。それから女性の最高の頭脳といわれた山川菊栄さん、あの人も母親が大変な博識でお母さんが率先して水戸から東京のほうへ出てきて、さらに横浜まで足を伸ばして「いっしょに勉強しよう」ということで娘を引っ張っていった、というようなこともあります。北川千代にしても森田たまにしても、神奈川の女性の文学者である　　野上弥生子全部そうなんですけれどみんな母親でないにしても、結婚してからの夫がそうであったり、あるいは巡り合った編集者の手によって、あるいは作家同士の支え合いによってとか、永井龍男さんなどもかなりたくさんの作家を育てていますし、どうしても当時とあっては女の人は自分一人では教育というところから切り拓いていくということができ難かった、どうしようもなかったのだと思います。それが、学校教育、小学校の教育すら受けていない千代子にとってどれだけひどいことであったか、それを思います。しかも千代子は何しろ身体が弱かった、これで延々と長生きしてくれたらあるいはどこかでまた浮かぶ瀬もあったかと思うのですがそれも出来得なかった、そういう事が二重三重になって千代子の悲劇になって、千代子の影も作品も消えてしまっていったのではないかと思っています。

私の話はこれで終わらせていただきます。

司会　どうもありがとうございました。この土地に女性ながらそういう人が住んでいたということを知って、千代子が身近に感じられました。

それではご質問をお受けしたいと思います。

森山　実は時間がありましたらご紹介したい記事がもう一つあったのです。青鞜の人たちが銀座のプランタンの喫茶店、その一階で千代子が何人かでお茶を飲んでいる時にどやどやと入ってきたのだそうです。そして千代子たちの横にある螺旋階段を羽織の裾を翻して、中の長襦袢のすそまでも翻す感じで上に上がっていったそうです。たまたま一階にいて階段を見上げればそういう光景になるのだろうと思いますが、それを面白く描いたものもありました。千代子という人は当時、自立はしたいという思いはあっても、これが悲しいかなあまり勉強していませんから青鞜の仲間のような知識を持っておりません。ですから青鞜の人たちの生き様に対してやっぱり対極にあったような気がします。ですから千代子と青鞜と、という見方で見直してみるとそこにまた面白いものが出てくるかなとも思っています。

実はこの『女學世界』を出しました博文館、このことについて私は全然調べが行き届いてないのです。どうも千代子が消えていった大きな理由の一つに博文館が手を引いたということが言えるような気がするのです。千代子を庇っていたのは編修部でも河岡潮風なんです。その潮風が２５歳で死んでしまいます。そうすると以後千代子を庇護する人が博文館の中にいなかった。そして発禁騒ぎが起こった。そういった時代の趨勢を見ていく時、もう千代子からは手を引いたほうがいいのじゃないだろうか、そういうような動きがなかったとは言えないような気がするのです。ですから少し博文館の中身が知りたくて芝の大門の近くにある三康図書館、あれは元はといえば大橋図書館（博文館のオーナーであった大橋家の図書館→編集部注）ですが、あそこに行ってみたのですがそれらしき資料を見つけることはできませんでした。もしそうした内面を見せてくれるようなものをご存じの方がいらっしゃいましたら教えていただけるとありがたいと思います。

もう、ちょっと時間が経ちすぎまして、私がこれ（『史の会研究誌』→編修部注）に書きましたのがもう９年前なんです。その時に塩沢さんのお話で、「実は１０年かもうちょっと前に『千代子会』というものがあったのが消滅したんだ」とおっしゃいました。その理由は会員の高齢化だそうです。横浜のほうでお集ま

りがあって塩沢さんも二回ほど参加なさったそうです。その時に５～６人の方がいらしたんだけれど全部７０歳以上で男性でいらしたそうです。でも本当に熱烈な千代子ファンという感じだったとおっしゃられていました。

私は女性史に関わっているものですから女性史のほうからいろいろ調べてみたいとは思うのですが、本当に一刻一刻が勝負という感じがします。明治生まれの方がどんどんいらっしゃらなくなりまして「ああ、あの時お会いしてお話を伺っていれば」という地団太踏むような思いをすることがあります。本当にこの鵠沼という地域は宝の山だと思うんです。だからご近所でいろいろそういうようなことを耳になっさたり、眼になさったらどんどん記録をお残しになったらどんなにかいいのじゃないかなと思います。私、自分がそれで困ったものですからつくづくそう思います。

鈴木（「語る会」会員）　お調べの中で千代子さんの男性関係というのが一切お分かりにならなかったということですか？

森山　分からなかったというよりは私は千代子の言葉を信じたいと思った部分がございました。

鈴木　前に出ました高木さんの本にありますようなことが事実あったのかのかどうかというようなことは、実際お分かりにならなかったのでしょうか。

森山　それは跡付けておりません。

鈴木　一切文壇から消え去ったということは何かそういうところにも関係があるのではないかとも私は思いますが、いかがでしょうか。

森山　そうですね。それはあるかもしれませんね。その当時でしたら世間に顔向けできないとかそういうようなことがあったかもしれません。

鈴木　先程お子さんがまだいらっしゃるという話を承ったのですが、以前どこに住まわれていた何という姓のかたですか。

会場より（秦さん）　羽坂医院のそばで、姓は内藤です。

関根（「語る会」会員）　万福寺さんのお話を聞きますと、今の住職さんもＪＲ東海道線のところまで、姉さんといっしょに千代子さんがお墓参りに来られた時に送っていったことを言われております。墓を見ますと千代子ではなく内藤千代と墓名があり、最近ではどなたもお墓参りにいらっしゃらないということで、先日も川上さん（「語る会」会員）たちと見に行った時も、石塔がちょっとかしいでいるかなという感じで寂しい思いがしました。私も近くに住んでいるものです

から時々行きますが年々寂しくなる気がします。

先程おっしゃられたように、当時は軍国主義が関東大震災以降発展してまいりまして、女性と男性の関係は当時厳しくなってきました。藤沢でも戦争中などは女性と一緒に歩いていても駅の回りに警官とか憲兵が居て「おいこら」というようなことを言われたくらいでした。男女の仲はそのように厳しく、しかも家族主義の時代ですからそういうお妾さんなどは世間から疎んじられたものでした。また内藤千代子さんはあまり世間を知らないからだまされるようなこともあった方だと聞いています。二三冊の本は万福寺さんにも残っているということですが、写真はないそうです。今日は万福寺さんにも本を持ってここに来ていただくようにお願いしましたが、ご用事があるということでありました。

森山　私大切なことを一つ落としていました。そこの展示の一番隅です。『エンゲージ』の出版契約書というものがございます、これは本物ですからお帰りにでもご覧ください。その出版契約書に一割二分という印税のことが書いてあります。この一割二分というのが当時としてはものすごい高額ではないかと新聞が書いているのです。

ところがこれをよく読んでみますと一割二分のうち千代子の手許に渡るのは四分なのです。そしてあとの八分は河岡照恵に渡すとなっています。河岡照恵、この人は潮風のお母さんです。『エンゲージ』というのはまだ潮風の生前に千代子の単行本の3冊目ということで、ページ建てから表装まで何から何まですっかり用意して、まるで用意し終わって亡くなったという感じで没しているのです。あまりきちんと用意されているものだから博文館も出さざるを得なくて出したというその経緯も書いてあります。

ですから決して言われるように売れに売れた、がぼがぼと儲かった作家とは思えないのです。むしろ普通が六分くらいの印税が当たり前だと言われている時にあれだけ売れてわずか四分しか手に渡っていないという、歳がいかないからでしょうか、それとも女だからでしょうかあまりにもひどすぎると感じました。それも私が千代子にのめり込んだ原因の一つでもあります。

司会　森山さん、今日は本当にありがとうございました。

「鵠沼を語る会」は今後もこういった形で公開講座を開きたいと思っています。皆様ぜひまたお越しください。　（記録担当　松岡）

《内藤千代子略歴》

1893(M26) 12月9日　内藤広蔵、いくの長女として東京下谷西町（現、台頭区東上野）に生まれる。3人の兄は皆幼児に病没。父は象牙の彫刻師で士族出身。

1896(M29) 3歳　一家をあげて鵠沼の知人の別荘に移転。翌年、本村の農家の離れを借り移る。

1898(M31) 5歳　妹かめ誕生。父の手で千代子の教育始められる。この後学齢期になっても学校には上がらず終生学校教育とは無縁。

1901(M34) 8歳　新築なった自宅に移る（現、鵠沼松が岡３丁目）～生涯の住居となる。

1906(M39) 13歳　7月　父広蔵肺結核にて没。9月　妹かめ村の小学校に入学。

1908(M41) 15歳　「田舎住ひの處女日記」、『女學世界』8巻15号の懸賞日記文に応募、三等入選、賞金10円。

1909(M42) 16歳　「嫁に行かぬ人」同誌9巻15号で二等入選、賞金30円。

1910(M43) 17歳　「思ひ出多き函根の湖畔」同誌10巻2号で一等入選、賞金50円。これよりほとんど毎号に作品掲載、寵児となる。

1911(M44) 18歳　9月　初の単行本『スイートホーム』発行人河岡勝で刊行。
10月　河岡潮風と対面、以後潮風の指導を受ける。
12月　『ホネムーン』同発行人で刊行。

1912(M45) 19歳　7月　潮風死去。
(T 1)　11月　大阪毎日新聞に「謎の少女～鵠沼の千代子訪問記～」掲載される。
12月　『エンゲージ』博文館より刊行。

1913(T 2) 20歳　2月　「一身の革命」を『女學世界』に発表。

1914(T 3) 21歳　10月　『生ひ立ちの記』牧民社より刊行。

1915(T 4) 22歳　6月　『惜春賦』刊行、発売元誠文堂。「毒蛇」の掲載『女學世界』15巻8号より始まる（～17巻6号未完にて）。

1917(T 6) 25歳　6月　『冷炎』京橋堂より刊行。

1918(T 7) 26歳　7月　『春雨』同所より刊行。

1919(T 8) 27歳　10月　『毒蛇』三徳社より刊行。

1923(T12) 29歳　双生児の姉妹出産。

1925(T14) 31歳　3月23日肺及び咽頭結核で没。鵠沼神明の万福寺に眠る。

＜展示資料＞

①書籍

『生ひたちの記』　牧民社　　『冷炎』　高橋堂
『小説　春雨』　高橋堂　　『エンゲーヂ』　博文館
『スキートホーム』　博文館　　『ホネムーン』　博文館
『五五の春』　博文館
『個性きらめく』ー藤沢近代の文士たちー　藤沢市教育委員会

＊コピー

『鵠沼日記』　『内藤千代子集』
『惜春譜』
『毒蛇』１・２

②雑誌

「女學世界」　17巻５号　博文館
「女學世界」　８巻17号　博文館

＊コピー

「女學世界」　８巻15号　田舎住居の處女日記
「女學世界」　９巻15号　嫁にいかぬ人
「女學世界」　10巻１号　うれしい正月日記
「女學世界」　10巻２号　マダム振り
「女學世界」　13巻12号　五人空想図　富士そうなん記
「女學世界」　15巻10号　日本アルプスへ
「女學世界」　９巻２号　お正月日記

③新聞

＊コピー

大阪毎日新聞　大正２年１月４・７・12日／大阪訪問記
新聞紙名日時不明／内藤千代子の墓

④エンゲーヂ出版契約書謄本

⑤明治・大正の新聞雑誌記者の名刺

追憶鵠沼（1944年～45年8月）

木　村　　梢
（木村功夫人・邦枝完二長女）

（1）戦時下のこと

昭和十九年一月の末、邦枝家は江戸より住み馴れた麹町を去り、神奈川県藤沢市鵠沼上岡六〇九八番地へと引き移った。

疎開第一号の文士として新聞社から大げさに写真を撮りにきたり、地元紙の記者と称する人が挨拶に訪れたりと賑やかに鵠沼の序幕ははじまった。

空襲こそまだなかったが戦争真っただ中の寒中である。しかしさすがに湘南は暖かいと思った。暖をとる燃料といったら炭と練炭のみである。それほどの貯えがあるわけぢやなし母は気をもんでいたが、日中の暖かさは麹町の家と競べようがないほどだった。

南向きの日当たりのよいこの家は母が一人で見つけた家である。鵠沼海岸駅前の不動産屋を訪ねてたちまちに決めて帰京した。一人で物事を決めるような人ではない母が、一生にたった一度決断をした勇気あることだった。父も一目惚れでこの家に決ったのである。

そもそもこの家の持ち主は当時有名な映画評論家であり、『スタア』という外国映画の雑誌を出していらした南部圭之助さんである。

本名を荒木誠之助さんといって、我が家から６０メートルほど先に戦時中とは思えぬスペイン風の白壁のモダンな家に住んでいらした。蔦のからんだこの家に十七歳の私はカルチャーショックを受けていた。その荒木さんの小父様のご両親のために建てた家が、私達の住むことになった家である。敷地３００坪の中に建てられた純和風平屋はぐるりと広い縁側に囲まれていて、大きなガラス戸大きな障子のゆったりとしたいい家であった。何本もの桃の木、ばら、矢車草と沢山の苺畑、あとの空地はただただ白くて深い砂ばかり。周りにある松の木が吹く風に鳴る。松風の音とはこういうものであったか、と東京っ子の私と妹は笑った。

戦争をしばし忘れて親子の暮らしは始まった。だがそれも束の間、食糧を確保しなければ生きていかれない。見違えるほど逞しくなった母は、近在の農家や片

瀬の漁師を訪ね廻っては、手に一杯の収穫を持ち帰り家族を驚かせた。

父がした最初のことは「竹」である。若い頃から竹が好きで、麹町の庭は何種類もの竹で埋めつくされていた。そんなに愛した竹をいさぎよく捨て去った麹町なのに、新しい家の広い庭を見ているうちに未練が蘇返ったのか。猛宗竹を植えよう、と言い出した。冗談でしょ、と私は言った。戦争中なのよ。御近所の方たちがなんと思うかしら。そうでなくても自分達と世界の異る流行作家が越してきて……と冷たい色眼鏡で見ている人たちを感じ取っていた私である。

そんなことにまるでお構いなしの父は、ある農家と交渉して牛車に何台分かの黒土を運び入れ、立派な竹を数十本も植えたのである。　同時に３００坪の周囲を竹垣でめぐらせた。ばらは好みではないからと、荒木さんに引き取っていただき、砂地の１００坪は野菜畑にした。雑草取りから種植え水やり肥料やり、と家族が朝から夕方まで一所懸命働いて育てたことは、戦争という時代の中でたった一つのおかげ様であった。

荒木家のこちら隣りは林達夫さんの英国風な素敵な家で、このお宅の造りの一つ一つ、家具の一つ一つに私は興奮せざるを得なかった。多感な歳の少女は御夫妻に様々の質問をし続けた。小母様はちょっと怖い方でさだめしうるさい女の子と思われただろうが、小父様は優しくて温厚な方で私をとても可愛がって下さった。

当時わたくしはひどい喘息の持病があり、麹町時代から毎日新聞社へ徴用逃れで行っていたが、その頃になるとほとんど外出もままならず、家に籠って本ばかり読む日々を送っていた。

東京では疎開が奨励されて鵠沼にも知り合いの方たちがどんどん疎開してきた。作家、新聞社、ＮＨＫ、歌舞伎、と、父の知合いが増えて、それも皆さん東京に居た頃よりお暇な様子で、我が家へよく訪ねてこられた。どなたも戦局を憂う話ばかりで、憲兵や特高刑事に聴かれたら大変なことを口にしていた。

父も作家としての仕事はなかったが思いがけず忙しいこととなった。それは爆風よけというか、ガラス戸に紙を張る、ま、気休めには違いないがどこの家のガラスも十文字や格子に半紙を細切りにして張ったのである。凝り性の父はそれを見事に美しいものに変えた。元来器用で絵もうまかったが、極上の和紙で桜や菖蒲、紅葉、雪輪などをつなぎ模様に切り、格子柄にはめこんだり、波状の横線に重ねたり、と、そりゃあびっくりするほど素敵なものになった。それを見た方たちが、ぜひ我が家にも、と注文殺到である。お昼の食事付という条件を出されて

父は困りながらうれしそうであった。

のりとはけを風呂敷に包んで知人宅へ行った。片瀬の高田元三郎（毎日新聞編集局長）さんのお宅も貼ったと思う。今になって残念なことは写真が一つもないのでどんなに綺麗だったかを伝えられないのである。戦後もしばらくそのままであったが、日に焼けて赤茶けてはがれてきたので全てはがしてしまった。

豪農の斎藤家と知り合ったのは暗い戦時中に明るい光のようであった。何分古い記憶で地名も覚えていないが、本鵠沼の駅のうしろの道を行くと畑ばかりである。そこをどの位歩いたか、私はいつも自転車で行ったが随分遠い道のりであった。実にいい人たちばかりの家族で、うちの一家をとても気に入ってくれて、繁く行き来をしていた。大地主にふさわしい風格のある一家で、戦争中は藤沢航空隊の人たちの面倒をよく見ていたし、戦後は青い目のアメリカ兵も出入りしていた。

私がはじめてお酒を飲んだのはこの斎藤家である。日本酒もウヰスキーもつがれるままに飲んでけろりとしていたので、一滴も飲めない父と母はびっくり仰天したという。

この斎藤家と親しい藤沢の日本精工に頼まれて、工員の慰安会に誰か大物の役者を連れてきてほしい、とのことで、父は親友だった市川猿之助さんに相談をした。いいよ、俺が行くよ、と即座に決定。十九年の秋頃だったと思うが実現した。藤沢駅まで猿之助御夫妻（現猿之助のお祖父様）を私は一人で迎えに行った。初対面で判るかどうか心配していたら向うさんから声を掛けられた。

「梢ちゃんでしょう。お母さんの若い頃とそっくりだから判りましたよ。」と。

御夫妻は防空頭巾を背中に背負ってゲートルとモンペ姿だった。その晩斎藤家に泊られて翌日の慰安会は大成功だった。連獅子だったような淡い記憶しかないが……。

この頃から各地で空襲がはじまった。二十年のお正月はどうしていたろう。斎藤さんのおかげでお餅にはありつけたが、もうおめでとうもいえない闇のようなお正月だった。実際灯火管制は厳しく、黒布で覆った電球の下一筋の灯りに家族が額を寄せ合って夜を過した。うちの隣組の組長さんは怖かった。ちらりとでも灯が見える家には土足で上っていきなり電気を消した。

鵠沼ももう終いか。父がぽそっと言った。

日本精工の人が何人か来て裏庭に防空壕を掘ってくれた。二畳敷ほどのしっか

りした壕で周囲は木の板を打ちつけてあった。母の衣裳箪笥を二つ入れた。食器類は瀬戸の火鉢に入れて砂地に直接埋めた。壕の蓋はトタンと木の上げ蓋だったが夏になると何百匹という蚊の大群がいて爆弾より怖いと思った。空襲警報が鳴りみんなが壕に入ったあと、私は一人で家の中を見廻っていた。その時近くにロケット弾が落ちた。ヒュッーヒュッーという音が頭上を通って爆発音が辺りを覆った。飛び込むように壕に入ったが、直撃弾だったらこんな壕は消し飛んだことだろう。その時のロケット弾は本鵠沼と斎藤さんの家の中間に落ちた。翌日見に行ったら、さつま芋畑が大きくえぐれていて凄いと思った。

三月十日、五月二十五日、下町と山の手の空襲の後、父や母の友人知人が多勢歩いて鵠沼のわが家まで来た。泊まった人達もいたし一っ時休息して田舎へ行った人もいた。あまりの恐しい体験に泣く人もいなかった。

鵠沼に疎開すると決った時、先祖伝来の地を捨てるのか、と冷笑した人たちはここまでこうなると思わなかった、と言った。父は先見の明とはこういうことだよと呟いた。

平塚の空襲が私の見た一番近い空爆である。西の空が夜通し燃えて燃えて、飼っていた鶏が昼間と間違えて鳴いたり騒いだりした。私はいつものように大きなリュックサックを背負っていた。中には『風立ちぬ』（堀辰雄）、書き写した牧水の歌集、当時最も好きだった、今西汎子（ピアニスト）さんの『巴里より愛する母へ』という本、それと私にとっての恋人、のちに結婚した木村功の軍隊からの数通の手紙が大事に収まっていた。

軍からのお達しで父たちは松の根っこ掘りに狩り出された。林さん、荒木さんの小父様たちと一緒だった。兵隊にも行かない軍需工場へも行かない年齢者を一とまとめにして、なんの目的か判らないが父たちはどこかまで行かされた。僅かな手辨当を抱え背中を丸めて出てゆく父が哀れで哀れで、やっぱり日本は負けるんだ、としみじみ思った。

戦争末期であることは口にこそ出さないでもみんな判っていた。小型飛行機グラマンが機銃掃射をする日があり松の幹に銃弾がささったり、平穏と思っていた鵠沼もいよいよの時が来たかと感じた。

ある晩近くの空爆に来たB29が、日本の高射砲に撃たれたのか巨大な火の玉となって落下してきた。頭上を行き過ぎた瞬間は空中火にふさがれたようだったが、その時父の叫ぶ声を聴いた。

「よし、俺に任せろ、お前たちは近寄るな。」火ばたきと呼ばれた竹竿の先に

藁を巻きつけた棒を両手にかかげた父は、その火の玉のように真っ赤な顔をしていた。何を言っているのだろう、と私は冷静に父を眺めていた。

翌朝あのB29は江の島の遙か沖に落ちたと聴いた時、はじめて母と妹と三人で大笑いとなった。しかしテレくさそうにはにかんだ父にだれもそれ以上言えなかった。その頃、「伝単」と言われた宣伝ビラも降ってきた。決して読んではいけない、拾ったらすぐに届けるように、と警防団の人たちが言い廻っていたので馬鹿正直によく見なかったが、明るい電灯の下で楽しそうに食事をしている日本人家族の絵があったのだけは覚えている。

新聞社やNHKの父の友人たちが近いうちに戦争は終わる、八月に入るとそう言った。低い声で会話をする小父さまたちから笑顔が消え、詳細の判らぬまま不安に包まれていった。

大型爆弾が広島に落とされ続いて長崎にも落とされた。新聞はそれだけしか報道しなかった。ポツダム宣言を受け入れれば戦争は終わる、とこれも父より聴かされて十五日を迎えた。

あの日は日本中が同じだった。

暑かった。空が真っ青で蝉の声ばかりの昼だった。ラヂオの前の父は泣いていた。

戦争が終わった、功ちゃんが帰ってくる。私は繰り返しそう思っていた。

平和になった戦後の鵠沼の日々は、今の私にとって最も大切な想い出の日々である。いずれ書きたいと思っているが……。

「クゲヌマエンシス」補遺

伊藤　聖（「鵠沼を語る会」会員）

さきの『鵠沼』77号で「クゲヌマエンシスと呼ばれる小さなエビの話」を書いたが、そのときに慶応大学の磯野直秀教授から、石川千代松博士の原記載がある『動物学雑誌』のコピー（英文）をいただいた。明治中期の鵠沼の面影を伝える貴重な文献でもあるので、鵠沼に関係のある個所の英文（ただし誤植を直した）と訳を載せておきたい。なお訳は磯野教授に目を通していただいた。

ミスジヒメカイエビの記載（『動物学雑誌』vol. 7, Feb. 1895)

The species was first discovered by myself in small pools formed by rain water collected in depressions on the sandy sea-shores at Kugenuma in the province of Sagami, during the months of July and August, 1892. These pools were formed after a heavy rain at the end of July that year, and the first trace of the animals were observed a week afterwards. These were already quite mature, the females carrying numerous eggs laid under the shell. Associated with this species many aquatic beetles, bugs, mosquito-larvae, and a species of Branchipus hereafter to be described, were plentifully found in the pools, the water of which always remained perfectly clear its temperature rising in hot days to 38° or even 39℃. The continued dry weather of August dried them up at the end of the month, so that the pools existed only for about a month, during which time only one gamogenetic generation was found,

ミスジヒメカイエビは、1892年の７月から８月にかけて、相模国の鵠沼の海岸の砂地の凹みに、雨水が集まって出来た小さな水溜まりで初めて私（石川）が発見した。それらの水溜まりは７月の終わりに降った大雨によって生じたもので、１週間後には最初のミスジヒメカイエビがみつかった。すでに十分成熟していて、メスは甲殻の下に多数の卵をもっていた。ミスジヒメカイエビと一緒に、多くの水生小昆虫、ボウフラ、後述する予定のホウネンエビなどが発見されたが、その水溜まりは暑い日に水温が38° から39℃に上昇しても、透明なままであった。８月には乾燥した天候がつづき、その月の終わりに水溜まりは干上がったが、その１か月ほどの期間には、有性生殖の世代が１世代だけ観察された。

ホウネンエビの記載（『動物学雑誌』vol. 7，号不明，1895年）

> I found two colonies of these animals in Japan, one in the shallow pools of rain-water at Kugenuma, Sagami, in company with *Eulimnadia Braueriana* described in the February number of this Journal, and the other in the paddy fields at Yoshiwaratambo together with *Limnetis biformis*, also described in the January number of this Journal.

私（石川）はホウネンエビのコロニー（群集）を２か所で発見した。１か所は相模国鵠沼の雨水で生じた浅い水溜まりで、この雑誌の本年２月号に記載したミスジヒメカイエビと一緒にみつけた。もう１か所は吉原田圃の水田で、本年１月号に載せたタマカイエビと同時に発見した。（訳終わり）

*

1892年（明治25年）といえば、東海道本線が国府津まで延長され、藤沢駅が開設されて５年が経っている。鵠沼の開発も本格化し、鵠沼館、対江館（これには疑問もある）、東屋などの旅館も営業を始めていたころである。

石川博士は、大雨の降った「一週間後には生き物がみつかった」と書いているので、どうも７月末から８月初めにかけて鵠沼に滞在して、毎日観察や採集をしていたように思われる。当時はすでに学生ではなく、東大（帝国大学農科大学）教授だったから、前記の旅館に泊まるだけの余裕はあったに違いない。東海道線が開通したからといって、一週間後にまた東京からやってきたと考えるよりも、滞在していたと考えるほうが自然ではないだろうか。

また注目されるのは、７月末の大雨でできた水溜まりが一か月も残っていたことである。酷暑だったにもかかわらず、干上がったのは８月末という。砂地なら水はけはいいと思われがちだが、鵠沼は「くぐひぬま」といわれたように、かつては砂丘と低湿地だった。したがっていったん大雨が降ると、砂丘の間に造られた道路は冠水して、なかなか水が引かず、戦後下水道が敷設されるまでは、排水に苦労したものである。明治のころなら、なおさらのことだっただろう。それにしても一か月も浅い水溜まりがあったとは…。

『鵠沼』77号で、昭和10年から配達をされた澁谷良之さんは「一木通りあたりは全部沼だった」（P. 27）といわれているが、それは大雨のあと何日も水が引かなかった記憶から、そのように話されたのではないだろうか。

史跡見学―大磯町

鈴木　三男吉

今年度の史跡見学は１０月の例会で大磯ときまった。ほかに候補地があったわけではなく、企画委員中島氏の周到な計画と熱心な提案により最初から決まっていたといえる。

ご承知のように大磯は、湘南地方はもちろんのこと全国でも一番早く海水浴場、保養地として開けたところで、有名な伊藤博文の滄浪閣をはじめ貴顕高官財閥がこぞって邸宅・別邸をつくり、現在もなおいくつかの建物が史跡や迎賓館として残されている。是非一度は見学したい町である。さらに大磯町長石井宣和氏が中島氏の友人である関係から、一般には非公開としている旧吉田邸及び旧大隈邸・陸奥邸を特に公開して下さるという。

平成十年十月二十七日午前十時、大磯駅集合。この日天気晴朗にして空に一点の雲なく、というわけにはいかず、雲が低くたれこめ今にも降り出しそうな気配であったが、予報は夕方までは保証。

参加者（五十音順）

穴山雄一夫妻、有田裕一、川上恵久、川島禎一夫妻、古宮一郎夫妻、佐藤和子夫妻、鈴木竹夫、鈴木三男吉、高三啓輔、寺田良夫、永井久子、中島　明夫妻、西　忠保、野口ゆくえ、榛葉昭市、林三郎、松岡　喬、六浦美智子、矢崎政弘（以上２４名）

（１）旧吉田　茂邸

駅前よりバスで城山公園前下車、邸前まで前記大磯町長石井氏とプリンス・ホテルの伊東氏とが出迎えて下さった、恐縮至極。まず庭園で七賢堂、吉田氏像を見学。七賢堂は中国の「竹林の七賢」をもじって造られたのであろうが、岩倉、大久保、木戸など明治の元勲に吉田を加え七人の政治家がまつられ、毎年吉田氏の命日近くの日曜日に関係者が集まり当時を偲んでいる。晩年吉田氏の身の廻りの世話をしていた「小りんさん」も九十一歳で毎回元気な姿を見せているという。邸宅は吉田茂の義父で「東京日々新聞」の創立者としても知られる横浜の実

業家吉田健三氏が明治十七年に建てたのが最初で、現在のは戦後昭和二十七年、外国からの賓客の迎賓館として純日本式に建てられたものである。吉田氏の愛した窓から富士山が見える二階の居間、湯船が舟形の浴室などもそのまま残されている。吉田氏の死後いずれかに売却されることになったとき、佐藤栄作氏の斡旋で西武鉄道が譲り受け、現在は大磯プリンス・ホテルが管理している。一万坪の敷地に建坪三百坪の豪邸、宰相吉田茂の旧邸としてだけではなく、戦後新しい日本を生んだ舞台の一つとして、いつまでも保存されることを心から願って、次の見学地城山公園へむかう。

（2）県立城山公園、大磯町郷土資料館

吉田邸の道を隔てた北側一帯。中世の小磯城趾を公園に整備したもので、資料館はかつてこの地にあった三井邸城山荘を模して建てられたという。館長大石氏自から展示品を中心に大磯町の歴史を説明して下さり、さらに奥の会議室を私たちの昼食場に開放して下さった。これまた恐縮至極。昼食を早めに切り上げ、バスで駅の方に戻り次の旧大隈邸・陸奥邸へむかう。

（3）旧大隈重信邸、旧陸奥宗光邸

相携えて明治の重要国事条約改正に尽瘁した二人の政治家の別邸もまた、滄浪閣の東隣り一万坪を超える敷地に仲良く並んでいる。現在は双方とも古河電工の所有で古河電工大磯荘と称し、大隈邸を西館、陸奥邸を東館と呼んでいるが、陸奥宗光と古河家との関係は古い。明治の初め古河財閥の創始者市兵衛は当時大蔵省租税頭をしていた陸奥の知遇を得、次第に肝胆相照らすようになり、宗光の次男潤吉を養子とし古河總業の跡継ぎにした。（その後市兵衛に実子虎之助が生まれ潤吉は家督を虎之助に譲った。）このような関係で、古河市兵衛は明治三十年、陸奥宗光の死後、晩年病を養っていたこの大磯の別邸を譲り受け、同三十四年には隣接の大隈重信の別邸をも買い取り、全体を聴漁荘と名付け、今日に至っている。明治外交史に光る陸奥の『蹇々録』は、明治二十八年除夜に脱稿したといわれているが、おそらくこの別邸においてであろう。東館、西館それぞれの管理人小林、西巻両氏の説明を聞きながら、国事に奔走し一人は脚を失い一人は獄舎に繋がれた、明治の政治家たちの固い信念を想いながら旧陸奥邸を後にした。次は徒歩で沢田記念館へ。

（4）沢田美喜記念館

混血孤児の教育施設エリザベス・サンダースホームで有名な沢田美喜氏はまた、隠れキリシタンの遺物収集家としても名を知られている。記念館は二階が礼拝堂、一階が展示室で、「銅鏡」「伝日本最古木製踏み絵」「シーボルトのマリア像」、そのほか高山右近や司馬江漢ゆかりのものを含め八百余点の遺物が展示されている。館長鯛氏の挨拶を受け、まず、一般に「魔鏡」といわれ、普通では何も見えないが、光線の屈折の具合によってキリスト像がはっきり映し出される銅製の鏡の謎を解いたビデオを見せていただく。引き続き殉教者の悲しい歴史を物語る展示品の一つ一つを見て廻るうちに思わず時を過ごし、時間はすでに三時半になっていた。

予定としては、日本三大俳諧道場の一つで西行の「鴫立つ沢」で有名な鴫立庵、新島襄終焉の場所となった百足屋の記念碑，そして藤村の墓のある地福寺などが残されているが、私たちは夕方から降り出すかもしれないとの予報を信じ、このまま大磯駅で解散することにした。

最後に今回の見学に際し、大変お世話になった石井大磯町長をはじめ多くの方々にお礼を申し上げるとともに、事前に十分な準備を整え、極めて効率的に有意義な一日を過ごさせていただいた中島氏にたいし心から感謝したいと思う。



旧吉田邸前にて

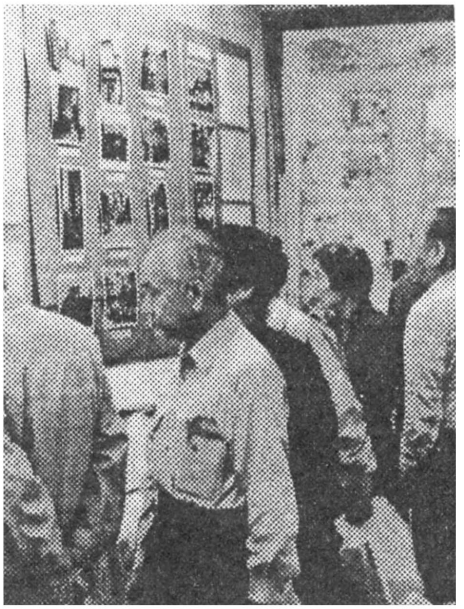
第２２回鵠沼公民館祭り「鵠沼を語る会」展示

本年の公民館祭りは１０月１７、１８の両日開催されました。台風の来襲で特に１７日の土曜日は暴風雨と言ってもよい荒天でした。

「語る会」の今年のテーマは“『鵠沼の別荘』大正から昭和にかけて”というもので、会誌「鵠沼」７６号から取り組んでいる『鵠沼の歴史的家屋を尋ねて』の特集の趣旨に沿ったもので展示の企画は編集委員会が中心となって進められました。

展示場所は例年通り図書室前のロビーの壁面でしたが、年々参加サークルが増えてこれはこれで結構なことですが、反面当サークルの展示スペースは徐々に狭くなり、研究発表としてある程度系統的な展示が必要な当サークルとしては頭の痛い問題となっています。

それはともかく、今回の展示内容を記録することにしましょう。タイトルボードの下に展示説明（後のページに全文を掲載）、続いて新旧の鵠沼の地図、３枚目に別荘の所在を図上で示した地図を展示しました。次に別荘の写真１２枚を現存のもの、すでに取り壊しなどで現存しないものを明示して展示しました。



図書室壁面の右端は今回の展示の「特集展示　渡辺邸」です。昭和初期の建物がほぼ当時のままで残されている貴重なものですが、今回は昭和６０年に県の文化財保護課が調査した際の詳細な見取り図を同課の許可を得て、写真３葉とともに展示しました。（渡辺邸の展示説明は文末に掲載）見取り図を見ることによって例えば多様な窓の形態（両開き、片開き、上げ下げ、引き違い）がバラエティ豊かに使用されるなど設計者の苦労が伺えます。

その右隣のパネルは会誌「鵠沼」７７号に特集した『劉生が住んだ家・松本陽松園』についての展示となります。会員の女性陣が描いた当時の陽松園のイメージ図に劉生の作品が添えられ説明文が付くという力作となりました。７７号（９８．４月）当時よりも研究が進み、劉生の家の間取りも正確さを増してきました。

二日間に多くの見学者を迎えましたが、「この家は今はないが大層立派のものだった」と思い出を語られる方、「昔はこんなに家が少なかったの」と感心される方、「こんな家に一度でいいから住んでみたい」という現実的？な感想までいろいろ聞かれ説明担当も大忙しでした。初日には藤沢市長も訪れて展示を見学されました。



惜しむらくは特に初日は天候のせいで、館外での催しに参加できない人達がロビーにあふれて、ソファーの配置が展示に近かったこともあり、展示会場か休憩所かの区別がつきにくかったことは残念でした。

来年の公民館祭りにも今年に劣らない展示をしたいと思っています。

最後に、準備から会場での説明、後片付けまで参加された会員の皆様お疲れ様でした。特に祭り全体の催しを嵐の中、館外でお手伝いされた方々本当にご苦労様でした。

（松岡記・撮影中島）

第２２回鵠沼公民館祭り

「鵠沼を語る会」展示

『鵠沼の別荘』大正から昭和初期にかけて

私ども、「鵠沼を語る会」では、学習テーマのひとつとして、鵠沼海岸の別荘の歴史を調べております。その結果の一部をここに紹介しました。

◆

鵠沼海岸一帯はかって鵠沼浦と呼ばれていて、もっぱら本村の漁師たちが利用する漁場に過ぎませんでした。

明治２０年ころから、伊東将行らの手で土地の造成が始まり、主に別荘用地として分譲、貸与されています。

大正初期には、鵠沼海岸一帯に、茅葺きの家や洋風の建物などが点在するようになりますが、地元の人々は、これらの建物をすべて『お別荘』と称しました。

古い地図には鵠沼海岸一帯を『別荘村』と記したものもあります。鵠沼海岸発展の過程で、別荘の存在は鵠沼商店街発展の源としても見逃せないものであります。

◆

鵠沼の別荘は、その利用の実態からつぎの　**４群**　に大別できると思われます。

Ａ群……**開発初期の段階で誘致された大区画別荘。家族、銀行家、実業家などいわゆる名士の別荘。**

Ｂ群……**大地主の経営による貸別荘。**

Ｃ群……**関東大震災後、被災した東京の本宅から移住して来た人たちが常住した住宅。東京への通勤者のはしりとなるが、地元ではこれも別荘と呼びました。**

Ｄ群……**地元の業者が単独あるいは共同で土地を造成し、比較的小規模の住宅を分譲、販売した別荘。**

Ｂ群については大小無数にあったと思われます。
また昭和 30 年代以降は、別荘の細分化が進み、かっての別荘の面影を残すものはわずかになりました。ここに記録した別荘は、私たちが聞き及んだだけのものであり、ほかにもまだまだたくさんの別荘があったと思われます。皆様のご教示をお待ちします。

現存する個人別荘　　渡辺邸

鵠沼の個人別荘は、前表以外にも数多く列挙されるであろうが、これらの中で今回我々はその代表的建造物として　渡辺邸　にスポットをあててみた。

渡辺邸の概要

建築年　昭和９年

設計　三井（ミイ）道夫氏設計

施行　小林富蔵

構造　木造三階建て、地下室ボイラー付き、コンクリート床基礎

規模　床面積　一階　１９８．４０㎡
二階　１０６．４７㎡
三階　６０．４４㎡
地階　１２．３７㎡
合計　３７７．６８㎡（約１１４．５坪）

仕上　屋根；銅版瓦棒葺き、外壁；木骨造モルタル塗り、一部鉄平石張り

渡辺邸は昭和８年から３９年にかけて創建された。元来、この地には渡辺実氏の父君である、荘氏の別邸が建っていた。当時は現在の鵠沼駅から境川に至る、７千坪に及ぶ広大な敷地であった由だが、明治４０年頃には既に現渡辺邸とほぼ同じ位置に、木造平屋の和風住宅が建てられていた。

現渡辺邸はハーフティンバーのスタイル（木骨造；基本構造部分は木材を使用）であるが、そのスタイルが本来持っている民家風の調子をよく保っている。

外観、内装ともに野趣に富んだ雰囲気であり、常住を意図した住宅ではあるが、いかにも別荘地の住宅にふさわしい。

戦後、こうした建物の例に洩れず、米軍に接収され、やっと昭和２９年に解除されたという。

（解説と図版は「神奈川県近代洋風建築調査報告書」
神奈川県教育庁文化財保護課　昭和６３年刊行によります）

鵠沼を語る会　活動の記録

（平成１０年９月～１１年３月）

川上恵久記

平成１０年９月例会　９月８日（火）１０時～１２時
　参加　２１名
　議題（１）公民館祭について。
　　（２）会誌７７号について。
　　吉田興一さんの追悼号とする。
　　（３）史跡見学について。
　　大磯（吉田、大隈邸、沢田記念館等）を１０月２７日に見学する。
　その他　穴山雄一さん入会され通常会員３２名となる。
平成１０年１０月例会　１０月６日（火）１０時～１２時
　参加　１９名
　議題（１）公民館祭について。
　　テーマ「鵠沼と別荘」－大正から昭和初期－とし、分担をきめる。
　　（２）史跡見学について。
　　中島さんより大磯見学について詳細スケジュール説明される。
　　（３）公民館サークル交換会の報告。
　　佐藤さんより公民館祭でシンポジュ-ム「子供の環境について」行われると報告される。
　　（４）会誌の配布先、配布方法、印刷部数について。
　その他　今井さん入会、岸本さん次回より入会で会員３４名となる。
　　会誌７７号配布される。
平成１０年１１月例会　１１月１０日（火）１０時～１２時
　参加　１６名
　議題（１）東屋旅館記念碑建立について。
　　市教委生涯学習課鈴木、篠崎の両氏、神奈川県立近代文学館理事佐江氏出席、趣旨の説明と会としての協力を要請される。
　　（２）森山女史による「内藤千代子女史について」の講演会開催について。
　　１月３０日（土）１４時～１６時公民館に於て行うことに決める。
　　（３）合本の今後について。
　　合本委員会で検討することにする。
　　（４）今後の会の進め方について。
　　例会を単なる打合せの場に終わらせず、例えば会誌の寄稿者からの補足説明などをしていただいたらどうかとの提案ある。
　　（５）塩沢さんの資料の活用について。
　　（６）次回の会誌で鵠沼における「講」を取り上げたい。
　　鈴木三男吉さんより提案される。
平成１０年１２月例会　１２月８日（火）１０時～１２時
　参加　１９名
　議題（１）新年会をどうするか。

１月１２日公民館で行うことにする。
（２）「内藤千代子女史について」の講演会について。
野口さん案内のチラシを作り、公開講演とする。
（３）東屋記念碑についてのその後の経過報告。
（４）今後の会のあり方について。
昔の鵠沼、本村にもっと目を向けていったらどうか。
その他　内藤さん入会される。与安さん退会されており通常会員３４名。

平成１１年１月例会　１月１２日（火）１０時～１２時
参加　２５名
議題（１）東屋旅館に関する記録保存についてのその後の経過。
（２）「内藤千代子女史について」の講演会について。
１月３０日開催の際の段取りをきめる。
その他　例会終了後新年会を行う。
新しい名簿、講演会のチラシを配る。

平成１１年２月例会　２月９日（火）１０時～１２時
参加　１６名
議題（１）「東屋旅館について考える会」についてその後の経過報告。
（２）来年度の行事計画について会員の皆さんの意見を聴く。
（イ）史跡見学（ロ）公民館祭（ハ）講演会その他。
（イ）については新しい会員も増え、本村方面を関根、榛葉、林さん等に案内を願い廻ったらどうか、（ハ）については協力会員の小林先生、郷土史家の大石先生にお願いしたらどうかと小生より提案する。（ロ）については来年度より今までと構想変わるかもしれないとの話あり、しばらく様子を見ることにする。
尚３月例会で皆さんの意見、希望を聴くことにする。
その他　会誌７７号に寄稿された鈴木三男吉さんより「中屋旅館について」の補足説明を聴く。
伊藤聖さん入会され会員３５名となる。

平成１１年３月例会　３月９日（火）１０時～１２時
参加　１７名
議題（１）公民館主催、小学生対象「探訪スペシャル」への協力要請について。
寒河江職員より上記企画につい協力要請あり、１０人ほど担当を決め要望に応じることにする。
（２）東屋旅館についての市への要望書について。
中島さん素案を作り説明し、編集委員会に任せる。
（３）来年度事業計画について。
引き続き検討。
（４）会誌記載の原稿の「わがすむ里」への転載について。
（５）会誌印刷、発行、発行部数について。
（６）来年度予算、要求次回例会に出してもらいたい。
その他　会誌７７号記載「岸田劉生の住んだ別荘」佐藤さんの補足説明を聴く。

編集後記

＊近頃鵠沼海岸の商店街を歩いて気づくことは、新規開店の美容室や花屋さんが多いことです。美容室には男性客も入っています。どちらも「美」に関係した商売ですが、美に縁遠い小生にはその理由がよくわかりません。一方、１００円ストアーの常設店が二軒もできました。こちらの方は、小生以前からの常連ですし、その理由はよくわかります。しかしその反面、永い間鵠沼の人々の生活を支えてきた古い商店が次第に消え去ることになりはしないか、こんな心配が生じてきます。とにかく、私たち周辺の変化は急に早くなったように思われます。十年一昔が十日一昔にもなりかねません。最高の文学賞を得た作品を字引を片手に読まねばならぬ時代です。

＊しかし私たち「鵠沼を語る会」は相変わらず古いものへのこだわりを持ち、その中から消え去ってはならないもの、忘れ去ってはいけないものを探し求め、それらを記録することに微力をつくしています。今回お届けする第７８号もこの意味で私たちの半年間の活動記録だといえます。

＊鵠沼に育ったただ一人の女性作家内藤千代子も、これまでは名前だけの存在でしたが、女性史研究家森山さんによって『女学世界』に咲いた花として、その全体像が『鵠沼』に甦ってきました。有難うございました。

＊戦中の荒涼とした本鵠沼の駅に咲く二輪の花（妹さんと共に）と嚙かれ、やがて『功大好き』の筆者となられた木村梢さんから当時の想い出をご寄稿いただきました。いずれ『鵠沼物語』をまとめてみたいとのお話です。大いに期待いたしております。

＊劉生の「村娘」のモデルをされた川戸さんの想い出も掛け替えのない宝物ですし、芥川の住んだイの４号を初めとする貸別荘群の考証も、東屋の歴史にとって不可欠であり、何らかの記念碑作製に役だってほしいと願っている次第です。

（鈴木）

鵠沼の歴史的家屋 記録へのご協力を

私ども「鵠沼を語る会」では、「鵠沼の歴史的家屋の記録」に取り組んでいます。別荘地鵠沼の特徴としてあった大正、昭和初期の大別荘、貸別荘も、急速にその姿を消しつつあります。時代流れとしていたしかたないこととは思いつつも、古きよき鵠沼への愛惜は禁じえません。

鵠沼の歴史としてせめて映像、図面に残して留めたいと考えた次第です。手初めとして「松本別荘」の記録にとりかかっておりますが、その他にもこれはと思われる建築物、建造物があれば当会までお知らせください。よろしくお願いいたします。

『鵠沼』　第78号
平成11年3月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください。

編集・発行　鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2001